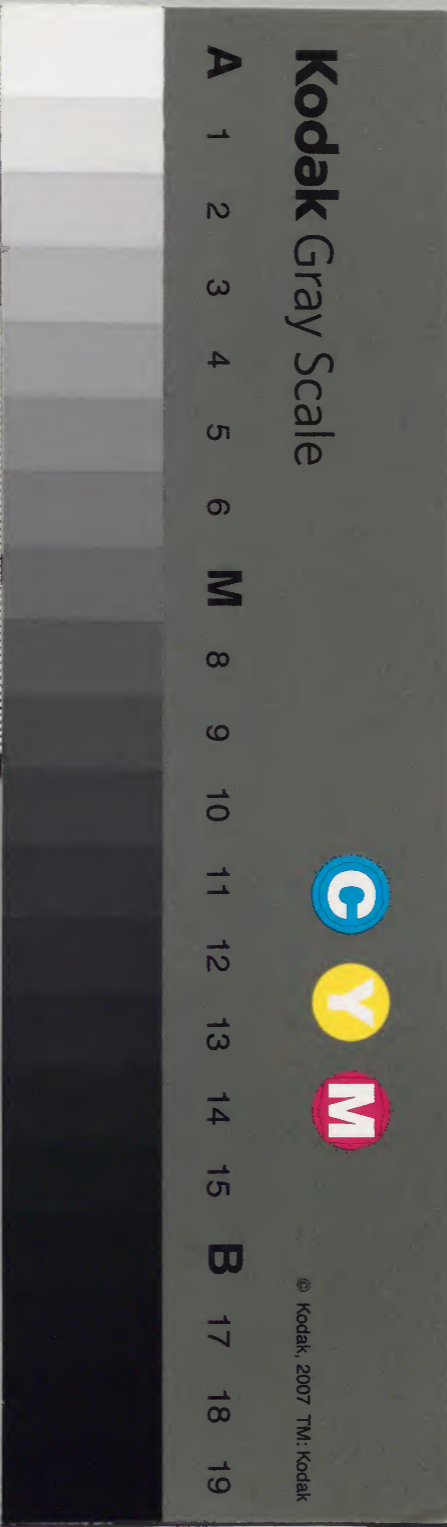


日本書紀傳 十九卷六

和 一〇五二二號

五十四

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (63)
函號	特 85 1



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

教
文庫印
印
省

南
庫
庫

文
庫
印
省

内一三六八三號

十九、六
卷
葉
拾
六
大
島
後
漢

見
卷
十
九
卷
六
後
漢
葉
拾
六
大
島
後
漢

御室と齋以初けむと有る二の句拾遺集ハ本綿シテ無懸シテ有リ又同集小石上ふとや壯士の大刀もがふ組の緒シテ無シテ宮路通ハむとも有リシテ無シテ志殿シテ訓むハ志陀禮を約めたる言あり孝徳天皇御紀小シテ無シテ此云之シテ娜屢シテ万葉十シテ九シテ小シテ無シテ柳十一シテ四シテ十シテ小シテ四シテ無シテ尾シテ有シテを以知べし志陀留ハシテ繁シテ無シテの意あり万葉三シテ十シテ小シテ竹玉字繁尔貫シテ無シテ有シテ有シテ諸此シテ無シテ言多理多流シテ有シテ云ハ自然あり多禮多流ハ有シテ云ハ物を然為シテ有シテ此を物をシテ無シテせたるを云ふハ志陀禮を約めて志殿と云ふシテ後世小四シテ十シテ云物ハ此シテ用シテ語シテ名シテ為

○日本書紀傳十九

○二百七十

△なり又常陸風記
 のも伊夜是留乃阿
 是乃古麻都尔由布
 志云云云云云歌
 見え見え又万葉
 飛引本本赤旗
 時人謂之爲至國
 後世言便於信大
 國と有正訓
 △又神樂木綿心
 小由不志天乃加美
 乃佐支多乃伊奈
 乃保乃伊奈乃保
 乃毛呂保耳志天
 與古礼子保毛奈
 之と見え又木綿
 九乃今日ハ早本綿
 取由て夏上麻の麻
 生の川原の御使
 しけり又三三三
 久小綿續の帯を
 取在て神のを考
 り妹の逢むと新
 六物小徒の麻生
 麻の葉取在て

有取郡條歌

るあり取と有あり能通えたり
 又万葉七卷三十七丁
 小本綿懸而祭三諸乃
 云く又ハ木綿懸而齋此神社尔云くあぢも有て木綿
 小取付とも取懸とも取岳とも云ハ皆同ト状ありて相
 近き語あり
 ○八咫鏡ハ第三一書ハ鏡作遠祖天抜
 戸兒已疑戸邊所作八咫鏡と有り古事記ハハ八咫鏡
 訓ハ尺云と作を記傳ハ三十四丁小延佳ハ尺當作咫と
 ハ阿多
 云々言ハく此ハ決く寫誤ハ者あり先尺と有を
 強て助けて云ハハ八寸を咫と云ハ十寸を尺とハ云
 あれども周尺ハ八寸と云事有り常小咫尺と連ね
 言て相遠くぬ字あれバ此記ハ佐加あり阿多ハ
 尺字を相通ハして此小阿多と註せらるも佐加と混
 用ハ

今年七月の六日の空堀川百首の君が高綿の帯を取在て神のり素の万代迄ハと有り

る故ありとも云べけれど猶熟思ふ然ハ非
 ず何れの古書あり阿多ハ咫字をのり書て尺と書
 る例無く此記ハ即白檮原宮段ハ咫鳥と書れバ
 此も必咫字あり可き者ぞ儲註ハ八尺と有る本ハ咫
 一字ありけむを本文の誤れと後人の校意ハ改
 めつる又ハ本文と共小誤れあり可ハ阿多の
 八字ハ上を八尺と爲る是も校意ハ加へつる後
 人の所爲あり決めて削る可ハ元小訓注ハ字訓を用
 ひたる例無く又ハを八と注し可き謂無ハ此ハ上
 下共小僻事ありを相照しても知べハ斯ハバ此註ハ

訓咫云阿多と有べきあり借此名を古來夜多能鏡と
訓れども斯く稱の古の例凡て之字を添ぬバ夜多加賀
美と訓べし彼八咫鳥の例をも思ふ可し注ハ阿多と
有を阿を省くハ如何と云ハ高天原の天をも云阿麻
と註せれども猶麻と訓むと同格あり一離ちて言ふ
時ハ天ハ阿麻咫ハ阿多あり故ハ然註したるあり然
れど高天又八咫と連ぬ言ハ時ハ高もハあり阿の
韻有る故ハ自多加麻又夜多と云るありけり見
えたり名義抄ハハ尺字を多加婆加理と訓て阿多の
加と訓む字ありハ實ハ尺を咫を誤れりあり其白檮
原言段ハ八咫鳥と云事三所出たる共ハ咫字のくふ

カ又之を添て訓べり由實ハ然る言あり永仁
大嘗會俊光卿歌ハ神代より曇るぬハ咫の鏡山云く
と有る類中古の歌詞ハ多在れども借此御鏡の御事
上世ハ一旦之日神の御事のハトガリ甚可畏くハ有れども其度量を以て云ハ又天の照照ハ形象を以て
申す二の言打合て一名と成れり者とる推察の奉
るけり其度量を以て云ハ三種神寶共ハ皆然ハ
て八坂瓊ハ弥尺瓊めて貫珠の緒の長を以て云あり
又草薙劔をも神皇系圖神皇寶錄等ハ十握劔と所見
たれバ其等も度量を以て云るあり然れバ此の八咫
鏡も其例と聞ゆれバ天徳御記ハ徑八寸許と有ハ畏
所ハ御在り坐す其御摸造の實を以て被記たるあり

バ口訣ハ八咫鏡者面八寸鏡也と註せざるも必其受る
所有る説少て謂無一とハ云べからず備上代物を量
る小身度あり有り曲尺あり有り其ハ上百六十六下六十此時
の新宮造の所小引る古語拾遺今手置帆負彦狭知
ニ神以天御量大小介伐大峽小峽之材而造瑞殿と所
見たるニ神ハ天御量小依り神名あり手置ハ布手
と云小同ト帆負ハ度追ホドオヒ少て物の度を追ホドて量り行を
云て此ハ謂ゆる身度の神あり次ハ彦狭知命の狭知
ハ尺知と云事少て右ハ云る天御量を以て物の規矩
を定給ふ神名と聞ゆれば此ハ曲尺の祖神小女む渡

今を傳下二平ハ云る
ハ此ハ八咫鏡を傳
下天大明命天香山
命の未ハ人部或有
ハ身取部の義少て其
神等の鏡を造り
してハ日神の大御身
の度を取て供奉され
由ハ因ハ考ふ
可く又其ハ田部
の下ハ云る如く其ハ
ハ八咫鏡の御事ハ
供奉ハ行事と以て
負ハ名ありとも合せ
考ふ可く事少り

し世給ひけし備此ハ八咫鏡ハ咫字を被用たるハ依て
已く私記ハ凡讀咫爲阿多者手之義也一手之廣四
寸両手相加正是八寸也故書傳謂咫爲八寸也今謂ハ
咫者是ハ八六尺四寸也蓋其鏡圖數六尺四寸歟其徑
二尺一寸三分余也と云るガ如く異様ある説ハ出來
小たり者少て説文ハ中人手長八寸謂之咫周尺也と
有る咫字ハ眼を看るガ故あり但一手之廣四寸両手
相加正是八寸也と云るハ古傳ハ聞ゆ其ハ一手之廣
四寸ハ手を横ハ當て物を量る法少て四指を以て
掬むを度として十握劔ハ拳脛あり云様あり事あり

然れハ四指を布て握と云ふ准しひハ五指を横ハ
 て阿多アタと云べきあり其二を合すハ即て八阿多と
 成れハ徑八寸許と有ハ相契合リと云べし然れハ
 八咫鏡と云ハ弥阿多鏡と云事ハ其ハハ物の重
 を八重あじ云ハハ少テ數量のハハ非れども一
 之廣四寸西手相加正是八寸也と有ハ如く身度の西手を合
 せて曲尺の八寸ハ至れハ者あり然れハ阿多ハ
 咫字ハ縱横の差有テ全く御國の法ハ合ざるを誰
 しも其字ハ心を引くく各其説を得ざる者あり四
 指ハ都加と云ハ手廣ハ阿多と云ふハ西蕃ハ且

△猶事記ハ阿多
 之大室有八阿多
 間ハ西手を並ハ
 たり程ハ格ナ組
 たり室を云ふ可
 一此ハ阿多ハ
 字ハ當りハ故ハ
 阿多と作れハ
 者あり此を以て
 八六六天等と何
 相叶ハハ事知
 可マ者

ても非ハ事あり今ハ當ベリ字の無ガ爲ハ咫字を
 借て書れたり然ハ事の混れハ出來ハけハ者ハ
 阿多ハ右ハ引ハ如く説文ハ中人手長八寸謂之
 の長を云ハハ皇國人の手ハハハ九六寸許ハ
 至ハ可ハ此ハ鏡の圓ハ見ても徑ハ見ても甚
 大ハ成て右ハ天徳御紀ハ合ハ事ハ更ハ釋紀
 一尺六寸三分外徑二尺云ハ若就講書之説者圖數六
 尺四寸其徑二尺一寸三分餘難奉納彼御極代内已以
 相違旁非無疑と云ハ然釋ハ引ハ天皇御紀ハ天徳
 事ありを思ハ可ハ

四年九月二十四日鑿求温明殿所納之神靈鏡并大刀
 契等申時重光朝臣來申云瓦上在鏡一面其鏡徑八寸
 許頭雖有小瑕專無圓規并帶等甚分明見之者無不驚

感と有少此事扶桑略記又帝王編年記等小御日記云
とて出たり又日本紀略同年十月三日條小去月二十
四日依宣旨御坐内裏賢所三所奉還御縫殿寮之間内
記奉納威所三所一所鏡件鏡雖在猛火上而不涌損即
云伊勢御神云二所真形無破損長六寸許一所鏡已涌
乱破損紀伊國御神云云と有る二所真形と有て長六
寸許と有ハ次二百九十八丁小云云が如く外宮の御あり其
一所鏡と有ハ日前大神小渡りせ給へるが太神宮諸
雜事記雜例集小引々神宮記小寛弘二年乙巳十一月
十五日内裏焼亡而去天德四年以來内裏焼亡之間不

被燒給佐留内侍所神鏡今度燒亡亦被燒損然略中公詮議
之間各勤奏云件神鏡者是非人間之所爲天地開闢之
時於高天原天鏡作遠祖天香山命乃鑄造之神鏡也件
鏡元三面也席皆以方尺而已一面坐伊勢國須一面坐
紀伊國内侍所須一面坐内侍所須是件鏡也子細具見と見え
たり中小一面坐内侍所と云々ハ右小引々紀略ハ二
所真形長六寸と有を誤りて實ハ右の三面共ハ
内侍所ハ御在ハ坐すハ皆御摸造多事申すも更ハ
ハ皆此ハ伊勢日前の御事ハ係て方尺而已と有ハ右
の村上天皇御紀ハ鏡徑八寸許と見えたりハ體ハ其

實を見て云ふは其正数ありを此ハ其大凡を云
ふれば方尺といふ云々あり予竊ハ聞つるハ皇大宮の
中ハ右の畏所の外ハ又其御摸造の御鏡三所御
在リ坐テ常御殿ハ齋ハハさせ御在リ坐テ毎年ハ磨
成リ奉ル事あり但此ハ上古の鐵鏡ありハ無ク常の
白銅鏡ハ御在リ坐テ由ありハ中古ハ摸造リ奉ル
故あり可ク若テ伊勢の御ハ中甚圓形ありハ頭花崎
あり御在リ坐テ其長八寸あり又一ハ圓鏡ありテ巨
六寸あり又一日前神ハ圓形ありテ内方ハ頭花形
御在リ坐テ其徑八寸弱ありと云ハ伯家部類ハ内

侍所御拜所被用之御鏡三面之圓と云有テ一ハ八頭
花崎一ハ八頭花形一ハ常の八稜鏡ありテ下ハ八寸
口傳ト有モ亦御摸造の狀ありあり右の如ク八寸ト
云事何れの書ハ行合たりハ猶釋紀を見れば先師
申云天徳回祿之時件神鏡内侍在灰燼之中不燒損其
鏡徑八寸許頭雖有小瑕專無損之由御記文炳焉然則
彼ハ咫鏡徑八寸歟略ト己ハ定め云々ハ然々然々
言あり右ハ云々如クハ阿多ハ弥阿多ありハ八寸の謂
ハハ非れども二阿多ありテ八寸ハ成れり事疑ハ
無ク可ク者ありハ咫鏡の咫字ハ此阿多ハ更ハ當
りたる事ハ有れども右の御鏡の

今又中人手長寸
師の赤縣度利考
曲尺の寸四分書
徑八寸と有る大
相違ひて別あり

長八寸あり事當昔世小隱無所一者バ説文小中人
手長八寸謂之尺と書小書たり一者あり可けり
此字小就て義を求る時ハ大違ふ可然ハ釋紀
小殆廻今案咫字者中婦人 手長八寸謂之咫云々夫
天照大神者陰神也件御鏡已奉圖大神之御像然者摸
婦人手長奉鑄之於八寸歟寸法相合御記文之上非無
所表乎と云々ハ僻事あり天照大神をい中婦人と
云ハ陰神と云々ハ更ハ古傳小且ても云ざる所不
ウケル 又御鏡の形象小依て八咫多と申すとハ古事
記者をや 記の八咫鳥を神武天皇御紀頭八咫鳥と有る義を以
て書きたり一者少て八咫鏡とハ八頭鏡の意あり其
ハ第一一書小思兼神云者有思慮之智乃思而白日宜
圖造彼神之象而奉招禱也故以石凝姥爲始工採天香
山之金以作日矛又全剥真名鹿之皮以作天羽鞆用此

奉造之神是即紀伊國所坐日前神也と有る以作日矛
ハ傳二十四ハ云々如く矛を造り其鋒ハ鏡を付故日矛と云あり
の四字の有所違へり採天香山之金又全剥真名鹿之
皮以作天羽鞆用此奉造之神日像鏡日矛是也ハ有る神字美加多と訓て二ハ必
有ぬ可ハ傳二十所あり紀國造系譜小即以石凝姥爲治工全
剥真名鹿之皮作天羽鞆採天香山之金作日矛則号國
縣大神又造日像鏡即日前大神也と有る如く此二物を共ニ作
ハ合ハざる所あり其日矛の事ハ下ふる茅纏之箱の
傳小云べし偕右小圖造彼神之象と云々ハ古語拾遺
小於是從思兼神議令石凝姥神鑄日像之鏡初度所鑄
以不合意是紀伊國次度所鑄其狀美麗是伊勢と有る
日前神也

如く日像之鏡を鑄奉る事あり然るハ皇太神ハ現御
 身御在り坐す神小渡りせ給へども御形體を圖造り
 奉るハ非ず全體の天日の象小造成り奉りて
 中臺の圓形ありハ天日の象を圖せりあり其八頭ハ
 ハ光輝の象を表ハせりあり此を以て日像之鏡と
 ハ申奉りて者あり若て先小造奉りて日前神を何を
 以てハ不合意と云ふとありハ上あり云々如く日前
 の御ハハも圓形ありて中ハ八頭花形有り圓形ハ日像
 小比ハ可いと雖も光輝小象どもハ頭花形の圓規を
 出さるが故小今日神を招禱奉りて其御光の出來む^坐

を待乞奉る諸神等の意ハハハ合ハざりあり又一
 面眞形と有る長六寸許ありハ唯圓形のこありて
 光輝小象ども所無りければ此をも合せてハ不合意
 とハ云ふあり右の初度所鑄を二面と云ハ古史第四
 十五段徴ハ出たり決りて大倭本記ハ
 天皇之始天降來之時共副護齋鏡三面云しと有ハ依
 たりたる者あり可一然れども師ハ釋紀ハ引誤れり
 を取りたる故ハ二面共ハ日前の御と爲りたる
 上ハ六十二下ハ明文抄ハ戴りてを引云ハ如ク
 右の長六寸許と云ハ眞形ハ豐受大神の齋鏡と成れ
 る者ありを見落さたりあり又ハ不合意のハをハ
 少而ハ文を成さたりも甚ハ閨推あり右ハ云々
 云ハ異あり又眞形の長六寸許と有ハ然ハ大小
 の論ハ預ハ程ハ事ハハ非ハ者ハや体源抄ハ引ハ異
 本古語拾遺ハ初所鑄ハ不合思と有ハ小字ありハ事
 實ハ合ざれば縦ハ本ハハハ小字ありハ伊佐ハ加ハ

訓までハ叶ハ故ハ阿多ト云ハ八端ハチノヘの義も有る可
ざる者有りハ記傳ハ八咫ハ借字ナリハ
其を次ハ説行むハ記傳ハ八咫ハ借字ナリハ
頭カサの意あり可ハ其據ハ倭姫ハ世記ハ天照太神一座御
靈形八咫鏡坐ト有下ハ謂ハ八咫者八頭也ト御鎮座
傳記神代寶鏡を云々新ハ一面者八百萬神等以石凝
姥神奉鑄寶鏡是則崇伊勢太神宮也ト有下ハ一名
日像八咫鏡是也八咫古語八頭也ヤツハチ八頭花崎八葉形也
故名八咫也中臺圓形座也圓外日天八座ト有を寶基
本記ハハ右の圓外日天八座を清明也の三字ハ換ハ
カ右等ハ多く兩部習合者の手ハ成ル言ハてハ有

おとも據無くして然る言を設く可ハ非ざれば必取
る所有る可ハ世記ハ謂ハ八咫者八頭也ト有を傳記ハ
八咫古語八頭也ト云ハハ咫字義ハ泥む可クハざ
事を明せる者あり又傳記ハ日像八咫鏡是也ト有ハ
八咫鏡ハハ謂ゆる日像之鏡あり事を詳ハ云ハ
カハ頭花崎の花崎ハ物の尖出ル所を翼ト云ハハ崎
ト云ハ是ハ八葉を圓外ハ並繞ルハ如クを云
あり中臺圓形座ハ其圓規を云テ可畏けれど其大
御鏡を今眼前ハ見奉ルハ如ク委ク記セハ文ハ
あり但圓外日天八座ト有ハ上の八頭花崎八葉形
也ト云事を再云ハありハハ其花崎ハ

る所ハ天日の光輝ハ象カ事右カ云カ如カく
物の座位を云カ非カバ寶基本記カ清明也カ有カ勝
る可カりむ如カ此カ物カ象カ事カハ如何カ如カく
あて是カあ思カ兼カ神カの深謀遠慮カ給カへ所カあて天
日の六合カ照徹カ如カ象物カを設けて日神カを招禱
奉カせ給カむ結搆カ如カ象物カを設けて日神カを招禱
如カ丹生川上社責布祢社カあ祈カ雨カハ黒馬を奉
り止雨カハ白馬を奉カるカ其意味似カた事カあり
偕又古語拾遺カ日神カを新殿カ遷奉カるカ所カ則天兒
屋命カ大玉命カ以日御網カ廻懸其殿カ有カ下カ今斯利久
迷繩是日影之像也カ有カ如カ注連繩カの藁カの先の岳
出カたカ日影カの指カす象カれカあカを以て日像之
鏡カ云カ事其像カ右の八咫カを八頭カと云カ就て記傳カ
在カを知カべきあり

書紀釋小天德御記を引て云く瓦上在鏡一面其鏡徑
八寸許頭雖有小瑕專無損圓規并蒂等甚分明見之者
無不驚感と有る頭字を波多と訓て下小問天德御記

文鏡頭云々如何答此紀第五卷領中頭比禮乃波之止
訓之以之案之鏡頭加賀美乃波多止可讀也是先師說
耳と有る思ふ頭と有る彼八頭の頭あり可一唯圓
鏡ありハ頭カと云カべカ又端ありハ端と有べき
あり又圓規并蒂等甚分明と有る圓規ハ彼中臺圓形
と有る處を云ふ可一偕頭を波多と訓べると云
ハ魚の鱗と同意あり彼花崎あり所と然云べし斯れ
ハ夜波多を約めて夜多と云ふ此記の註ハ云阿
多と有るハ咫字を借る小就て其本語を註せるあり
然れども其も八咫と續けハ夜多ありハ妨け無くと云

△中右記寛弘三年
 二月十五日内書火燒亡
 の所也火起自温
 明教神鏡神鏡大
 刀契啓不能取出
 神鏡大刀契書
 鏡僅有等目余度
 損無圓規失鏡形
 云々有る帯字是
 して

收たり故思ふ小頭字を波多と云ハ波阿多の切れ
 りて端邊ハアタ義して圓規の外圍其端の多く出たり有む釋小先師申云御記文頭
 瑕者端之義歟且以頭字讀波多者當記之說也と見え
 たり偕又頭八咫鳥と云も頭の八有ハ非可く彼圓
 規の外小花崎の出たりが如き狀小大鳥の頭上小鶏
 冠の如くして出たる物の有ハ八咫鏡小似たりけ
 りり名と爲るりて頭カシラの八有ハ非可く長の八寸ハ
 小ハ非るあり又右小八頭花崎小當りて帯字有
 公文選註小菓鼻也と有て菓實小閑多と云是ありハ
 又右の波多小相叶へるをも思ふ可くこと
 名義救小
 帯字を保

叙とも志宣志とも保流とも保志とも保曾豆良とも
 佐加由流とも訓り偕又記傳小頭ハ阿多麻の意あり
 と云一説も有れど此ハ故上件説下したるを今約め
 叶ハざれバ今ハ取ず日神の御身小度りた
 云ふ時ハ弥阿多鏡と云義あり寸法ありと八頭鏡
 の義ありと二義の打合て一言と相成れり者あり若
 て右小引る第一一書小圖造彼神之象と有ハ日像を
 圖す事あり私記小一平之廣四寸両手相加正是八寸也
 有る両手ハ何れハ神の手と爲む天照太神の御手
 あり可き事右の文を據りて知べり事あり又此第
 二一書小以鏡入其石窟者觸戸小瑕其瑕於今猶存
 有小天德御紀小其鏡徑八寸許頭雖有小瑕云々有り然るを私記小

今内侍所神鏡者崇神天皇御時更所鑄也然則本鏡有
瑕所鑄之新鏡不違本樣鑄付其瑕歟云云又先師申
云崇神天皇御宇被奉寫此神鏡之時不違本鏡鑄付件
小瑕之條於焉明白者歟と有が如く上天の本鏡ハ少
々も違ふ所無く摸造り奉るれを以て徑八寸許と
有ハ其本鏡の任ハ在を曉る可く又八咫ハ借字あり
て八頭又ハ八端ありと云ハ右ハ註せらるが如く日神
の御身を象ねるハ非ず大日の四方八面ハ照炫や
く形象を摸奉るるあはれハ中臺圓形ありハ日の象ハ
ハ八頭花崎と云ハ光の象を摸さねたる者あり
拾遺

小次度所鑄其狀美麗と有て次ハ大玉命の祢詞を載
たり小吾之所捧寶鏡明麗恰如汝命と有ハ其明麗ハ
る事の日神ハ似たり譬ふて其形を云ハ非るあり其
先ハ令石凝姥神鑄日像之鏡と有るハ其形ハ全体
の天日ハ象ねる○一云眞經津鏡ハ件の八咫鏡の一
事を知べきあり
名の如く聞えたりども必然る可くあり非りけり此
事類史ハ然有れども其ハ當昔御代ハハ在つる
私記あじの説ありけむが混れて終ハ本文の下ハ入
つる者あり可く其ハ日本後紀大同元年八月庚午の下ハ
中臣忌部の訴を断りて給へる所ハ是日勅命據日
本書紀天照太神間天磐戸之時中臣連遠祖天兒屋命
忌部遠祖大玉命掘天香山之五百箇眞坂樹而上枝懸

八坂瓊之五百箇御統中枝懸八咫鏡下枝懸書和幣白
和幣相與致祈禱者略下出たるハ此の文を出さねた
るあり小此の同トく八咫鏡の下小ハ云貞經津鏡と
記さねざるを以て知へ但右の文此小ハ和幣此云
尼枳底と有をも略りねたるが故小一云も共小載る
ねざる々とも思ゆれども訓註ハ唯其讀法小抱ハ
事小こり有けれ右の一云ハ其事實小一有けれバ略
々も可謂ね無を思ふ元本小ハ其字無りつゝむ
を其より後小加りつゝ者ありむ事知べ然るハ
問謂之眞經津若有意哉答眞是例文褒美称也私記小
是今相寄之美也俗間謂以此物相寄此物爲布都是其

義言今鑄此鏡相似相寄天照太神之御像也故謂之經
津也見えたる如し拙り説を出すむの事あり
けねハ八咫鏡と眞經津鏡とを同レ備上二百七小引
る紀略小威所三所一所鏡伴鏡雖在猛火上而不涌損
即云伊勢御神云二所眞形無破損長六寸許一所鏡已
涌乱破損伊國御神云云紀所見たる二所眞形ハ
其長六寸許ありと紀伊國御神と二所鏡の御事を申
せりあり此二所を釋紀及年中行事秘抄小引る共小
一所小作るハ却りて誤りて二所眞形あり中小一所
ハ其長六寸許一所紀伊國御神と云事を知らせたる
文ありあり其二所共小圓鏡小渡らせ給へる事を云

ろ者あり其ハ上百六十ハ己小引る大倭本記ハ天皇
 之初天降來之時共副護齋鏡三面小鈴一合也二下有る
 本註ハ一鏡者天照太神之御靈名天懸大神今伊勢國
 磯宮崇敬拜太神也一鏡者天照太神之前御靈名國懸
 大神今紀伊國名草宮崇敬拜大神也一鏡及子鈴者天
 皇御食津神朝夕之食白衣護日護齋奉大神今卷向穴
 師社所坐齋奉大神也（拜）有る此一鏡ハ天照太神之御
 靈小御在一坐て即其を天懸大神と祢奉（奉）此のハ
 咫鏡是あり次の一鏡を國懸大神と祢奉（奉）此のハ
 太神の前御靈と申奉る御事ハ古語拾遺ハ初度所

△右の紀伊國天懸大神の事云々ハ合せて照文形ハ政事要略の文を參照ハ見九ハ在內侍所之鏡三面也神代卷此云國懸
 也是地名致稱獨指日前申致天德四年御日記有鏡二面所謂日前并御食津神等哉此度燒之只有一面今一面漏

蓋致但此遺鏡
 何神乎今月九日奉
 移東三條於官司
 奉納御事積之聞
 忽然有光照耀如
 日內侍方官共以爲
 奇男官見之者亦
 有數兵所疑若皇
 日前大神放爲視
 後代界以て記之と
 見えたる鏡二面
 と云ハ皇大神の御
 を除きて餘の二
 面を云々の其一を
 日前御神と一を
 御食津神と云事
 大倭本記の古傳
 亦相叶いて爰れ
 一と云と云ハ更
 なる

鑄少不（合）意と有る下小是紀伊國日前神也と所見ハ
 ろ是ふり次ハ一鏡及子鈴者と有る一鏡ハ即上古ハ
 ハ天皇の御食津神と朝夕の御食の食白（ハ）夜晝の
 守護神と持齋とせ御在（一）坐（ハ）後（ハ）即伊勢小渡
 七給へる豊受大神の御あり子鏡（ハ）其御祖神小御在
 一坐て共小御食津神と一齋奉とせ給へる由あり
 此ふて右の紀略ハ謂ゆる威所三所鏡の數甚能合ハ
 ハ彼長六寸許と見えたる真形の御鏡（ハ）伊勢國度
 會宮の御靈小御在（一）坐す御事灼然（ハ）右の大
 ハ明文抄ハ載るを取（ハ）釋紀のハ誤多りハ倭本記
 第百三十四段徵ハ右の文を引（ハ）て云く此註ハ名草宮

崇敬解祭大神也と有ハ天懸神國懸神二面ハ係たる
註少テ天懸神と申すハ謂ゆハ日前大神を申せウ此
御鏡と國懸大神と坐す御鏡ハ初度ハ造わウ一ニ
面の御鏡あり云ハ誤少テ威所三所ハ合ざ
る説あり其ハ釋紀ハ天懸神と國懸神とを一ハ聯
けて畏無キを明文抄ハ名天懸大神也の下ハ今伊
勢國磯宮崇敬拜大神也の十二字有ハ上ハ其説ハ三
也の傳ハ云べけれハ第一一書是即紀伊國所坐日前神
讀テ曉テ可キ者あり一其ハ倭姫命世記ハ度會宮
の御事を記して豊受皇大神一座と有ハ下ハ元丹波
國與謝郡比沼山頂麻奈井原坐御饌津神亦名倉稻魂
是也御靈形眞經津鏡座圓鏡也神代三面内也と所見
たるハ決めて眞説ハ古傳あり者あり右ハ引
大倭本記ハ一鏡者天皇御食津神朝夕之食向夜護日

護齋奉大神也と有ハ小事の趣相同トハ者あり又右ハ
神代三面内也と有ハ大倭本記ハ天皇之始天降來之
時共副護齋鏡三面ハ見えたる是少テ右ハ引たる紀
略ハ威所三所ハ有ハ中ハ一鏡ハ伊勢國御神あり
一鏡ハ紀伊國御神あり斯レハ眞形と有ハ長六寸
許ハ所見たるあり豊受大神の御少テ御在リ坐レけ
ル此を以テ眞形と云ハ圓鏡少テ謂ゆハ眞經津鏡の
御事ありを知らハ又其ハ依テ八咫鏡の下ハ一
云眞經津鏡ハ有ハ決めて中古ハ小事の意を能ハ跋
すテ漫ハ小書入たる事著明クあり有ける諸眞經津

鏡と云ふ真を私記小褒美称也と云れども常小真
と語の初小置るとハ異あり丸を麻流と云ハ圓を麻
柿加と云ハ纏を麻登布と云ハ卷を麻久と云る語共
ハ何れも圓の意の麻を本小して下小活機の辞の添
て語を成せるありハ紀略小真形と云るハ圓形の義
あり此を以て真ハ圓鏡の義めて形小就てハ頭鏡ハ
云ふ例あり可一經津の義未思得ず雖も強て云
ハ天皇本紀又今集解小見えたり鏡速日命の天より持降給ハ
カ一十種神寶の中小瀛都鏡一邊都鏡と所見たりハ
大小の義あり可一事己小傳十二百四十三下小註とガ如

今又管茶疏小真經津
者貞正經津之意
其似百之像也
ハれハ信と奉難

然れば彼八頭ある長八寸許の大鏡ハ對へて真形の
長六寸許あるをバ邊都鏡とハ云るあり可一事を其間
を布小轉して真經津鏡とハ云けりあり
相寄の義あり可く云れども經津主神又師靈ありの
布都ハハ北背けり又通證ハ經津者振也天地生之元
靈謂之布留と云ハハ真經津名義如字運轉流行貌
と云ハハ又ハ忍神鏡之各真經津者天日之稱不祖謂
鏡有別称あり云ハハ類ハ何れも根無ハ空言ありて據
小不足又記傳ハ真經津鏡ハ真大鏡ありと云れたり
也此ハ合偕世記ハ右の如く神代三面内也と有ハ大
倭本記又日本紀略の趣ハ合て更ハ動くありハ所見
たりハ此三面の神鏡小就て又異説有り上代本記ハ
止由氣大神の御事也天津水影之寶鏡留居吉佐宮

給こ有る下小真經津寶鏡三面鑄表故鏡作神名号天
鏡命其縁也と有て次小多賀宮の御を御形靈鏡坐在
昔天鏡神鑄造三面真經津鏡是也一面者止由氣大神
寶鏡一面荒祭神御靈坐也と見え又本縁あり豊受大
神宮條あり其事を載たり小三面之内第二之一面者
是今崇奉荒祭宮之御靈鏡亦第三之一面是多賀宮之
御靈鏡是也と有て真經津鏡ハ度會宮の御を荒祭宮
多賀宮の御と合せて三面あり又天鏡神と申すも右
の如くハ鏡作神の事ありて即石凝姥命の坐り寶鏡
開始と云書あり天鏡命の所鑄造と有て三面の鏡圖

を載たりハ如何有む其圖の事ハ信難れども強
て事の狀を按ふ小古語拾遺小初度所鑄不合意是
伊國日次度所鑄其狀美麗是伊勢と有ハ天照太神の
前神也御をのと並載たりありて件三面の中小も豊受大神の
御と成れりハ猶日前神より以前小造れたりあり
あり備其真經津鏡も三面ありハ其初て造れたり
時小此も諸神の心の合ふ迄と作れりあり三面小
ハ至れりありむを其餘の二面ハ天照太神の荒魂神
和魂神の御靈とハ後小定めて其八咫鏡小副て天降
り給へる者ありけり然れハ神宮の書共小三面と有

と紀略小所見たると此時小成りし神鏡合せて五面
御在一坐る小荒祭神多賀神の御形ハ御摸造の事ハ
かカも被及カり一々朝廷小御在一坐すハ伊勢日
前外宮の三所の威所三所鏡カて御在一坐す御事
小あむ有けり斯ねハ荒祭宮多賀宮の御形も長六寸
許の真形カつて真經津鏡小あむ渡りせ
給へカけり然れハ右の書共ハ何れも外宮の御神を
或ハ天御中主尊又ハ國常立尊カ申す掠めたるカり
有けり右の三面の鏡の事御○下枝懸書和幣和幣此
あじハ決りて古傳ありあり云尼松
底白和幣ハ第三一書小ハ下枝懸以粟國忌部遠祖天
日鷲所作木綿見え古事記ハ此小同トク於下枝取
岳白丹寸手書丹寸手而有り又他書小此の事を載

たりハ皇太神宮儀式帳小ハ下枝懸天真麻木綿有
り皇太神宮祓豆譜圖帳小ハ下枝波天乃香豆比女加
作留真蕪乃木綿著豆有あじ共小其一二を云る小
ころハ有けり實小ハ書和幣白和幣共小荒衣和衣
等を並べ懸たり者ありけり其ハ古語拾遺小先
小物を設備あり所小令長白羽神伊勢國麻績祖今俗
也種麻以爲書和幣古語尔今天日鷲神造木綿津咋見
神穀木種殖之以作白和幣是木綿也以上二令天羽植
雄神倭文遠織文布令天棚機姫神織神衣所謂和衣古
尔伎多倍見えて下小其物既備搦天香山之五百箇真賢

木古語佐祿居而上枝懸玉中枝懸鏡下枝懸青和幣白

和幣と出て右小謂ゆる文布神衣の二を遺せらば此

一二を擧て上件の物共の大凡を云ら古文の格あり

者あり此を以て古書の讀解難きを知ら可し此小

あざ有て遍く群書小涉らず○青和幣和幣此云古事

記小青丹寸手と有ら丹寸手ハ假名あり此ハ木綿

を白和幣と云小對へて麻を青和幣と云らあり出雲

風土記小大原郡高麻山中略古老傳云神須佐能衰命御

子青幡佐草咄命是山上麻蔭初故云高麻山下と有ら

神名の青幡ハ字の如くして青の生糸を以て織たる

任の布を云あり佐草ハ麻草あり事云も更あり今も

麻皮の未織ざるを青麻ト云事常あり然らば万葉二

三十小白妙乃麻衣著十三二十小雪穂麻衣服あじ抄

五下の如く白ク物小云らハ十四七小多麻河伯尔左良須

氏豆久利十六ハ小經而織布日暴之朝手作尾あじ有

か如く瀑一潔めたるを云あり可ト予先小思ひけら

ハ白馬を阿表宇麻と云ひ又和名杓ハ白鹽和名阿和

之保人常所食也ト阿和小白字を用いたるを思へば

青和幣の青ハ物の潔白ありと云ら少て色の青ハハ

非トと思ひつらハ中トありク木綿の天然ハ白ク小

並べてハ麻ハ自然和幣此云ニ尼枳底の尼枳ハ和字の

義ありて荒衣の荒小對いたる稱あり其荒和の差別ハ

今ある本は、即ち
 又、然る事ありと
 多閑に師説の結布
 の類を惣云ふ
 有り結の切を佐
 伊豆云云に裂多閑
 あり又俗にふふ手
 十多閑

己小傳十三百四小云々が如く底ハ記傳八十三小底
 ハ多閑の約りたる言少て即尔岐多閑ありと有りが如
 く麻アサの衣タマヘを万葉四十八小庭立麻手アサテ於コラスニ于と有り此ハ
 衣小作アサる麻を於干を云あり十四十九小尔波尔多都
 安佐提古夫須麻許余比太尔都麻余之許西祢安佐提
 古夫須麻と有り麻衣小被あり又右小引る十六ハ小
 日暴之朝手作尾と有り麻衣日暴を造るを云あり故思ふ
 小底ハ正字手あり可一崇神天皇十二年御紀小始技
 人民更科調彼此謂男之弭調女之手末調也と有り男
 の弭調小並べて女の手末調の事を載るなりハ即

絹布の事と通ゆるが止小雄略天皇七年御紀小百濟
 所獻手末才伎タマヘと有り十四年御紀小吳所獻手末才伎
 漢織アサハトリ吳織アサハトリ及衣縫アサハトリ兄媛弟媛あど、服織アサハトリと衣縫アサハトリとを然
 云るありけりハ和幣の底の才伎テビトの手末小成りアサハトリ謂
 あり可一其ハ上ハナハ云々如く其服アサハトリと云も羽手と
 云事ゆて手以て織て羽小作アサハトリる由ありを思ふ小女工
 小成りアサハトリるを以て底アサハトリと云ひ手を経て成りアサハトリるを以て多
 閑アサハトリと云ありけり多閑ハ賀茂翁説の如く絹布の類
 を惣云称小ハ有れども其本ハ手小出て女工の謂ふ
 る事を知れば名義を明くる由無アサハトリ其ハ荒妙
 和妙明妙

照妙あじの妙く惣てを其妙と云々を以て惣名あり
 とハ云ねたり者少て古の裂キ又ハ古キありも同ト
 あり語例右の如く尼枳底ハ尼枳多閉あり其證を猶
 擧云あハ祝詞式小見えたり如く常ハ明多閉照多
 閉あじ云々を其大殿祭詞ハ明和幣古語云曜和幣
 と有ハ明和衣照和衣と云事あり然る小上小引る古
 語拾遺小麻を青和幣と穀を白和幣と爲るハ青和
 衣白和衣の義あり小次小令天柵機姫神織神衣所謂
 和衣古語尔と見えして和幣の外小又別小和衣と云物
 の有ハ如何と云小麻也穀也絹也等しく共小和やう
 あり物あはが中小打任せてハ絹珠小和より故小也和衣と云小就て

ハ此麻穀共小
 和衣小有ハ神
 幣ト一て奉り
 下小云々如ク
 あり故其和衣の織
 たり別て殊小和
 幣ト書けたり者

ハ其小別たむ爲小青和幣白和幣ハ云々あり然る
 を四月神衣祭詞小服部麻績乃人等乃常毛奉仕留和
 妙荒妙乃織乃御衣平進事平云云と見えたり小猶太
 神宮式ハ右和妙衣者服部氏荒妙衣者麻績氏各自
 潔齋始從祭月一日織造至十四日供祭と有て此趣小
 てハ絹を荒妙と云ハ麻を荒妙と云ハ此を以て思ふ
 小冠辞考小和幣の尼枳ハ織目の細くして和やうふ
 るを云ふと云ねつるが如く常ハ絹麻穀共小廣く
 和妙と云中小又其中より撰分る時ハ絹よりハ麻穀
 共小如何小織目を細く和やう小織とも絹和妙のの和と

今より万葉三十一
諸本解取時一十者
和細布布手間幸
座與有を以て木
綿と云んぬは為
對へて和衣と云んぬ
知べし

荒敷の幸下三百
九下云々

小ハ猶及ざるを以て麻穀以て織れる布を荒敷とい
云ふしけり然れバ麻と穀と相並べし時小の書白和
幣白和幣と云て和衣の意ハ有れども絹小對へて
ハ麻穀小文布をも合せて共ハ荒衣ある者ハ有
ける能為ずハ混いぬ可き事共ハ有る冠辞考ハ右
の太神宮式を引て如此有を對へ見れば絹を和
敷布を荒敷と云ふ此ハ絹と布とを對へ云ふ時の語
のミ其布の中めても善きを和敷悪きを荒敷と云ふ
と云ハ記傳八十四ハ古語拾遺ハ長白羽神伊勢國
今俗衣服謂之種麻以為書和幣古語ハ今天日鷲神造
白羽此縁也種麻以為書和幣是木綿也以上二物一夜
木綿以津咋見神穀木種殖之以作白和幣也
蓄茂と有り如此く書和幣をバ長白羽神小白和幣を
也

ハ天日鷲神ハ二神ハ分て云れども末ハ神武天皇
御代の事を云ふ所ハ天日鷲命之孫造木綿及麻并
織布アラシハ古語阿仍今天富命率日鷲命之孫求肥饒地遣阿
波國殖穀麻種其裔今在彼國當大嘗之辛貢木綿麻布
及種ニ物所以郡名爲麻殖之縁也天富命更求沃壤分
阿波齋部率往東主播殖麻穀好麻所生故謂之總國穀
木所生故謂之結城郡古語麻謂之總也今爲云云
云ハ神名式ハ阿波國麻殖郡志部神社名神大月次新嘗或号麻殖神
或号天日鷲神と有りハ書和幣を共小日鷲命の掌りて作
給ハ一事知るはなり然れバ以津咋見神穀木種殖之

有か如く麻を以^{ハテ}長白羽神同く天日鷲命の掌
 作せたるふ可^ハ其證を猶云ハ神代紀上ハ
 下枝懸以粟國忌部遠祖天日鷲所作木綿云ハ又下
 卷ハ天日鷲神爲作木綿者云ハ古事記云ハ彼
 此と合せて思ふハ白和幣のハ非^ハて必青和幣也
 具ふ可^ハければ如此云時ハ穀と麻と二種を以て木
 綿と云ハ見ゆ是又二種共ハ天日鷲神の作れり證
 とも爲べ^ハ猶又式云ハ其料物を舉たる所ハ木
 綿と麻とを出せり其を用ふる所ハ唯木綿の事
 の云て麻の事ハ見えぬが多^クも二種を合せて木

綿云ふ故ありけりて賢木ハ木綿を付あ^ハ云
 ハ二種を合せての名ありと有ハ實ハ然^ル説あり
 有け^ル斯^レハ此書^ハ和幣白和幣ハ天日鷲神其長^ク
 御在^リ坐^シて長白羽神を以て麻を種^シめ津咋
 見神を以て穀を殖^シめ給へりて其^ハ二神ハ右の物
 共を作^ル神ハ御在^リ坐^シず^テ天日鷲神が作^ル
 せ給へり^ハ又右の續の記傳ハ云く偕白和幣青和幣
 ハ有^リけ^ル又右の續の記傳ハ云く偕白和幣青和幣
 共ハ織たる布也云ハ万葉六^三十^三ハ木綿置手向乃
 山年十二^三十^三ハ木綿 牒手向乃山年^ハ有ハ必織
 たる布と聞ゆ又未織ハ爲て唯糸ハ爲たる任あるを
 も用たりと見ゆ故古書ハ木綿をバ作^ル云て織^ルハ
 云ず作^ル書て波具^ハ訓ハ即剥あり若布ありバ倭文

織あじの如く織と有べき事あり又式あじの布若于
端木綿若于竹麻若于竹と布の外に擧げ端あじは無
て竹と有も糸あじり用あり證あり斯れば木綿手次
木綿髪あじも糸の任あり可し然れば今賢木の垂た
るも是あり麻も常小の未織ざるを云へども又布を
同しく云る如く木綿も然あり然れば惣名の多開も
織たる未織ざる通はる云べき又神小手向の奴佐
も幣又幣帛あじ書も絹布をも云ひ未織ざる木綿麻
をも云ふ麻と書くは種の中の一小就てあり又後
世の紙を用ふるは木綿の代ありと有り然れば上
百二

八十小引る古語拾遺小昔和幣白和幣文布和衣の四
ハ下小引る中シブ文布と和衣と小ハ織と有る昔和幣
を並擧たる中ツル白和幣小ハ作と作を思ふ小麻を以
て緒と成し穀を剥て糸と成したるして此二ハ實小
糸あじり取置たりり織ハ云ざる小こり有け
れ其ハ皇太神宮儀式帳小天香山仁立握眞坂樹互
上枝懸八咫鏡中枝懸八尺縵乃曲玉下枝懸天真麻木
綿互種ニ祈申支此今賢木懸木綿太玉串止号之と有
て後世小太玉串と云ハ右の大幣帛を擬びたる物ふ
るを大神宮式小も著木綿賢木是名太玉串とも有て

木綿ハ糸あぐる無たる物あるを以て其古を思ふ可
くある有ける万葉三三十大伴坂上即女祭神歌小奥
山乃賢木之枝尔白香付木綿取付と有て賢木小著た
るハ糸あぐるある小其反歌小本綿疊手取持而如此
谷母吾波乞嘗と有ハ布小織たるハ手小捧持て神小
奉れハ状あるを思ふ可くある又十二卷十七下小白
者何時之真枝枝毛常不所忘と有も真枝小著ハ木綿ハ
糸ありしを知べし又十九卷四十二下遣唐使小大御
酒を賜へる時の大御歌小四船早還來等白香著朕裳
裾尔鎮而將待と有を冠辞考小此も木綿を白髪と宣
へるハ右と同トけし此著ハ御頭小著して右ハ
別あり木綿を御頭小著て御裾すで垂つて御在し坐
すハ古神祭の齋戒の時の状ありと云れし此ハ唯其
形容ありて白髪と云るありと上あり木綿も織たるハ

非る木綿ふ○白和幣ハ古事記小ハ白丹寸手と作れ
るを知べし下枝
乃第三一書小ハ懸下枝以粟國忌部遠祖天日鷲所作木
綿と所見たるハ麻と穀との二小亘る事右の青和幣
の傳ハ註るガ如し又古語拾遺小ハ今天日鷲神造木
綿以津咋見神穀木種殖之以作白和幣是木綿也以上
也と有ハ右二三百九小記傳を引て云々二物一夜蕃茂
神ハ木綿を所作せ給ふ神小坐り然るハ麻をハ長白
羽神小種一の穀木をハ津咋見神を以て種殖一の給
ひて天日鷲神ハ右の麻をも穀をも青和幣白和幣小
ハ作らせ給へる事右小出せる第三一書ハ更あり天

其津作見神
 と申すハ傳サニハ
 一ハ注ガ如ク天
 日鷲命ノ子大
 麻比古命ノ赤名
 あり由心部系
 圖ハ所見ナラセ
 也

孫降臨章第二一書小天日就鳥神爲作木綿者見えて
 別ハ麻ノ事ヲ掣ぎ々々を以知ベキあり備右ノ訓註ハ
 以上二物一夜蕃茂也ハ有ハ麻ノ穀木ノ二物ノ生立
 を云々者あり其神武天皇段ハ仍令天富命率日鷲命
 之孫求肥鏡地遣阿波國殖穀麻種中略天富命更求沃壤
 分阿波國齋部率往來土播殖麻穀好麻所生故謂之總
 國穀木所生故謂之結城郡和名秋郡名ハ所見ナリ
 布岐ノ所見ナリ是あり此ハ神代三御世ノ間高千穂
 宮ハ御在坐ける御時ハ西國ノ何れありて奉
 たりけるを神武天皇ノ中洲ハ都一給ひける初阿波
 國ハ先種殖給ひけるを猶東國ハ殖遣ハ一然
 種給へる者ありける記傳ハ三十八丁ハ豊後風土記ハ

速見郡袖富郷此御柳之申拵樹多生常取拵皮以造木綿
 因曰袖富郷見え寶基本記ハ木綿謂以穀木作白
 和幣名号木綿ハ有リ斯レハ白丹寸手ハ木綿ノ事木
 綿ハ穀木皮以て織ル布ありて古ハ遍ハ用ひたり
 一物あり其ハ殊ハ白キ物あり故ハ白多閉トモ白由
 布トモ白丹寸手トモ云あり又古書ハ拵機拵衾拵繩
 拵領巾あび多く有リ拵ハ同物あり故ハ葉ハ白拵ト
 も書リ又万ノ白キ物ハ拵衾又拵角あび枕詞ハ云
 シ備其穀ハ布ハ爲々事漢籍ハ所見ナリ和名秋ハ
 穀加知木名也ト云ハ字鏡ハ穀楮也加知乃木ト有

巾借布ハ爲一事ハ甚古の事也て稍降りてハ唯紙ハ
のこして布ハ爲一事ハ絶つて所見て同抄ハ穀紙
ハ見えて布の事ハ見えず此穀字を賀茂翁ハ由布と
訓れり然も有べし然るを古書共ハ由布ハ唯木
綿字をのこ用ひたり同抄祭祀具ハ本草注云木綿折
之多白絲者也和名由布と見え又木部ハ杜仲一名木
綿折之多白絲者也和名波比麻由美と見ゆ此ハ依て
思へバ古より由布ハ木綿字を用ふるハ杜仲の一各
を取れりあり然れども其ハ穀を杜仲と思誤れりして
實ハ杜仲を用ひたりハ非ず然るハ祭祀具ハ穀を

擧て和名由布と記す可き事あるハ木綿と擧たるハ
古より世ハ遍く用ふる字を出せりとのこして實ハ杜
仲ありと爲るハ非ず故ハ同ハ陶氏ガ説を引あが
ら彼所ハ杜仲の字を波比麻由美の名をも擧ず
其ハ別ハ木部ハ出せり當昔己ハ杜仲をバ由布ハ
用ひざりし事知べし取^意所見たり然るハ菅家名義
抄を閲るハ木綿を波比麻由美と書して又別ハ杜
中を然訓たるを思へバ穀のこありず杜仲を以て
ハ木綿ハ造りけりハも有べく也又字彙ハ楮木名
木也又首書ハ陸機云荊揚人謂之穀中州人謂之楮
云々有り又木棉樹名花如酒杯中有綿如蠶綿所作

又志那の皮を以て
木綿を作し事
傳三三傳十考
合十

又三十三志路多倍能
多郷吉平可氣

布と有ハ又一種別あり可一又記傳小杜仲の外小別
小本綿と云木大小二種有少其小きハ近代小弘水
紀和多の事あり大あり共小實の中小白綿有て布
小ハ為ハ物あり然れハ此等も又由布とハ甚く異ハ
少字の同ト見を以て思誤不可ハ云ハ其
木小成ハ方ハ右小引ハ字彙の木棉ハ也當ハ可ハ
む白多閑ハ方葉五ハ小之路多倍乃袖布利可伴之十
四ハ十八小思路多倍乃許呂母能素低字十五ハ三十小思
漏多倍乃蘓低字布良左祢又ハ三十之路多倍乃阿我
許呂毛互字十七ハ十八小思路多倍乃妹之衣袖又ハ三十
之路多倍能蘓泥布理可邊之十八ハ二十小之路多倍能
蘓泥尔毛古伎禮二十ハ十九小之路多倍能蘓田遠利加
弊之又ハ三十之路多倍乃蘓泥奈伎奴良之ハ七の例小

白枿衣不干又解

依テ白を斯呂ハ訓べ一又ハ十六小ハ白妙能衣乾有二
三十小ハ白妙之天領巾隱三ハ五ハ十小ハ白妙之手本兵別四
八ハ十小ハ白妙乃袖解更而又ハ三十ハ白妙乃袖可別六ハ二十
十六小ハ白妙之袖左信所沾而十二ハ十三小ハ白妙之我衣袖之
小ハ白妙之袖又ハ三十ハ白妙乃袖之別字あり
又ハ三十ハ白妙之袖之別者又ハ四十ハ白妙乃袖之別字あり
有ハ妙ハ借字あり正字ハ非ハ此字ハ就テ義を説
くハ素ハハ僻事あり二ハ十四ハ十小ハ白枿天領巾隱三ハ五十
小ハ白枿你版取箸而七ハ三十ハ十小ハ白枿袖纏上九ハ八ハ十小ハ白枿
之我衣字者十二ハ二十ハ十小ハ織版白枿衣又白枿帶可乞哉十
三ハ十五ハ十小ハ白枿乃吾衣袖字あり有ハハ右小引ハ豊後風

△又三十一白細之五
手亦

土記の取拵皮以造本綿と有る此のて此ハ正字あり
事下あり拵衾の傳小云を見り可し又三五十四白細
之衣袖不干五十八白細八爾舎人裝凍而五十九白細
之袖指可信三十三白細之袖漬左右二又四十七白
細之我衣手二八十二白細乃袖指代而九二十三白
細乃紐緒毛不解十五十小吾背兒我白細衣十一二十
小白細乃衣片敷又白細乃袖者間結奴十二三十三白
細乃袖不敷而又十四白細之手本寛久又三十一白細袖
手笠尔著又三十七白細之君之下紐又三十八白細之袖之
別者と有る細字を書りハ糸の細くて織目の精し

ひ意を見せたり者あり右小引る十卷の白栲を其並
び小白布シロヌと作たり小孝徳天皇二年御紀を見れば白
布アラヌと鹿布とを對へり此ハ異あれども賦役令義
解小謂細爲絹也麁爲絶也と有る麁小對へたり細字
ありを知べし又万葉十一六小白細布袖小端又十五
白細布乃袂漬左右二又二十三白細布乃袖觸而夜
又三十一白細布乃吾袖尔又四十四白細布之袖及之者十
二二十二細布衣不脱又三十一白細布我紐緒又十一一白細布
袖折反十三八十八小白細布筋奉而七細布の字を用
いたるハ此も亦右の細小同く布目の精微しきを

今上卷甲三丁小細
乃君之手枕

以て書けたり十一 二十 小東細布の借字小用いたる
を以ても細 布ハヌメ 布目小依て書る字あり事著明くある
有けり故其穀皮を以て織目 キヨフ の細く 潔白あり義
を以て白多閑 ハ云あり 穂尔夜之霜落十三卷二十
八丁小雪穂麻衣著七卷十七丁小白栲亦丹保布信上
之 あど有る冠辞考小栲の甚白き 餘光 穂云い
其白き小依て多閑小雪字を書たりと云れたる如
白き物 の譬小も多 閑 云て三卷五十八丁挽歌小細
尔舍人装束而又ハ白栲尔服取著而 あど尔の辞を以
受たりハ白栲 の如く装ふ事あり 如の義あり
ウ其ハ七卷四丁小白妙乃雲香隱流十五卷十一丁小
之路多倍 乃波祿左之可信 卷十七卷四十一丁小之路
多倍尔遊多波布里於吉底 あど雲小も手枕小 羽小
も雪 の云るハ白栲を以て譬と爲たる者少て右等
の辞 の亦も能も共小 自由布 云る例ハ万葉十三
曰く 如の義あり

丁小白木綿之吾衣袖裳之有ハ白木綿の字あざる白
多閑 の訓べり所あざる 如く六丁小山高三百木綿 白
花落多藝追瀧之河内者雖見不飽香聞之有ハ其次小
泊瀬女造木綿花三吉野瀧乃水沫開來受屋之有ハ如
く當昔木綿以て造花を物爲たるを世小翫ひけり
ら瀧水の碎け流る モツホヒ 形容 小取成したるあざ七丁
小泊瀬川白木綿花尔墮多藝都瀬清跡九十三 丁 小山高
見白木綿花尔落多藝都夏身之河門十三 丁 小淡海之
海白木綿花尔浪立渡あど有ハ卷二 三十一丁 小ハ木綿花
乃榮時尔とも有る冠辞考小此ハ木綿以て造れり花

を實ハ咲榮ハ花ハの如く云成ハたるありハ有りハ如

右の如く白木綿ハ白和幣ハありハ云事ハ此物ハの天然ハ小

清く白ハ如く右ハ引ハるハ如く霜ハをハ雪ハをハ此ハ栲ハ

小比ハへハたるを思ハふ可ハ一ハ三卷ハ小奥山ハ乃賢木ハ之枝ハ尔

卷ハ白香付木綿ハ者花物ハ有ハありハ又上ハ引ハるハ記傳ハ小

白髪ハもハ譬ハへハてハを思ハふ可ハ一ハ栲ハもハ木綿ハ同物ハあり

由ハ云ハれたハ栲機ハの事ハ天孫降臨章ハ栲幡ハ千千姫

命ハの傳ハ云ハべハ栲衾ハ古事記須勢理毘賣命御歌ハ小

阿夜加岐能布波夜賀斯多尔牟斯天須麻尔古夜賀斯

多尔多久夫須麻佐夜具賀斯多尔阿和由岐能和加夜

流年泥衰ハ有りハ發語ハハ出雲風土記ハ栲衾志羅紀

乃三埼仲哀天皇八年御紀ハ栲衾新羅國ハ万葉十五ハ五

あも多久夫須新羅邊伊麻須又十四ハ二十ハ小多久夫須

麻之良夜麻可是能ハあじ白ハ續ハけたハ栲皮ハ以ハて作

わハるハ衾ハありハ故ハありハ次ハ栲ハ網ハ古事記沼河北賣

歌ハ小多久豆怒能斯路岐多陀牟岐又須勢理毘賣命ハの

御歌ハ右ハ同ハくハ又万葉三ハ五十ハ小栲角乃新羅國ハ從

二十三ハ六ハ小多久頭怒能之良比氣乃宇信由ハ有ハ栲

皮ハ以ハて縁ハわハ網ハありハ故ハ小ハ白ハ云ハむハ發語ハ小置ハありハあり

次ハ栲繩ハ古事記ハ栲繩ハ之十尋繩打延ハ五ハ四十ハ小

又万葉三
栲小折紐
之長命并

拵繩之永命^五 ^{三十一}小拵繩能十尋尔母何等^有 ^八此も拵の糸^一て^二紬^三素^四あり故小長き意の發語^一
ハ爲るあり又拵領巾ハ^一刀葉^二三^三 ^二小拵領巾乃懸卷^一
欲す九^一 ^一細比禮乃鷲坂山^一 ^四 ^五 ^一拵領巾乃
白濱浪乃あり有て^二 ^四 ^一白拵天領巾隱^一訓^二如
く此も拵を以て領巾を爲れ^三由あり右の如く懸^一
も又懸^二と白とも云^三發語ありあり^四 偕右等の拵
ハ上小引^一豊後風土記小常取拵皮以造木綿^一有^二
寶基本記小以穀木作白和幣名号木綿^一有^二如^三穀
木の異名多^一あり者あり^二 ^一拵字を音考以繩織柳^一

枝爲糸^一有^二其訓無^三ハ穀^一ハ當^二ぬ字あり^三然
る意小借^一て書^二るあり^三む同抄小楮^一を加智能紀^一訓^二
拵も拵も同音同訓の字あり^一バ賀茂翁も云^二れ^三つ^四が
如^一く其等の字を草書より誤^二れ^三るあり^四む^一とも思^二ゆ
れども在^一ゆる古書中^一皆^二が^三然^四誤^一る可^二くも非^三れ^四バ
必^一古^二小據^三有^四けむ^一今^二ハ知^三る^四れ^一が成^二小^三なる^四あり^一假^二令^三
其出所詳^一あり^二ざ^三る^四あり^一有^二 ^一皇大御典小拵^一を木綿
の字と定めて用^二ひ^三せ^四給^一へ^二る上^三ハ字義の論^一ハ及
ぶ^二ま^三じ^四く^一然^二心得^三て^四戴^一訓^二奉^三る^四む^一る^二ハ皇國の人の
皇國魂^一あり^二者^三あり^四け^一れ^二實^三ハ漢の^四皇國^一あり^二と名
ハ同^一く^二て^三接^四外^一小物^二ハ異

ふらも有けねハ字義の合々をの信もハ成一難
き者あり然ハ柀字あども穀木の書す目標として
古人も用ひられたる多可けねハ ○音和幣の事小
然りとも深く思泥む可きハ非ず ○音和幣の事小
就て古語拾遺小令長白羽神伊勢國麻績祖今俗衣種
麻以為音和幣古語ハと有る長白羽神の長ハ麻の丈
の長さ由を以て称へたり者に見ゆ其ハ天神本記
小天八坂彦命伊勢神麻績連等祖と見えたる小和名
抄郷名小豊後國速見郡八坂又由布と有る小其由布郷
ハ上三二百九三小引る風土記小袖富郷此郷之中柀樹多
生下略と有る小万葉七二十菟紫小ての歌共の中小未通
女等之放髪并木綿山十六十小豊國之木綿山雪之

△傳三下注る
命の如く天日新皇命
命の子を大麻等
命と申す即津作
見命の事多々
子由布立命ハ
谷阿波和氣見
古命と申して
阿波安房二國
の志部の祖あり
けねハ其國小移
ふりたり其國小
報入たる長白羽
神をとの

とも有て木綿小名高き地名ありハ天日新皇神の子等
の己く其地して穀木を種殖しれハ名殘あり有べき
小合せて八坂郷の有る麻の好生茂々肥饒地
てハ天坂彦命ハ長白羽神の子あじありけむと思ふ小
八坂ハ八尺ありて麻其七績の丈の長さ小因りて称とも聞ゆ
るを思合せて云ふ小白羽ハ下小衣服謂之白羽と有
て其意ハ己小上八十一小説々如ハ此地理と拾遺ハ
仍令天富命奉日鷲命之孫求肥饒地遣阿波國殖穀麻
種と有るを合せて考へ小天八坂彦命ハ長白羽神の
子あり可く神名式小常陸國久慈郡天之志良波神社
御在し坐すハ同神ありが此鎮坐ハ古語拾遺神武天

今具ハ主計寮式
 小常陸國傳文三十一
 一端自餘輸曝布
 と有る傳文ハ辭
 神社ヲ奉奉可
 く曝布と有る自
 布ヲ謂ハル自
 羽ヲ引ケル此社
 より貢ナリ
 者多ク可

皇段小天富命更求沃壤分阿波齋部率往東土播殖麻
 穀好麻所生故謂之總國下と見えたる此時常陸あて
 も殖及がして其天上して初て麻を種給へり御靈
 を祀祭りし小とると思はるるあし神階ハ清和天皇
 實録小負觀八年六月 授常陸國正六位上白羽神
 從五位下同十六年十二月 授常陸國從五位下天
 之白羽神從五位上あぢ有り式小同郡長幡部神社辭
 神社大神御在し坐て同ト即リ神等あり由有る事あり思合す可し常陸
 國二十八社鎮座記と云小在太田郷白羽村祭神天之
 白羽神一名長白羽命金鷄命之齋也と所見たり
 又此
 白羽

今ハあり難天鈿
 女命ハ伊勢國十雄命
 小坐せ其より混ひ
 て其祭神と誤り
 ぬ知ハハハ傳下卷
 百七十八丁ハ云々
 有考合す可し

村小就て遠江國榛原郡相良郷小白羽村と云有り万葉二十
 卷小等倍多保美志留波乃伊宗等と詠り所て惣國
 風土記小白羽浦東境相良西限駒形之岬と有る是ふ
 此所小白羽大明神と申す御社御在し坐て此神小
 奉る料の絹を織る地と御衣村と云ふ式の服織田神
 社見ありと土人云し但風土記小服織田神社景行天
 皇七年所祭猿田彦命與天鈿女命也伊勢國麻績祖
 所見たりハ長白羽神小御在し坐す伊勢國麻績祖
 小宗神天皇七年御紀小伊勢國麻績君と有ハ麻績君
 祖某ありむを其名を漏さたりあり神祇令孟夏神
 衣祭義鮮小麻績連等續麻以織敷和衣以供神明と見
 元太神宮式小荒妙衣者麻績氏織造と有る如くあり
 を其神衣祭ハ皇太神宮伊勢小鎮坐小就て出來れり
 神事あり有けりハ麻績氏の末大和の京小在し程ふ

カケルバ其祖ありける事灼然き者あり神衣祭の御
事ハ祝詞講義小己小云少神名式小伊勢國多氣郡麻
績神社和名抄郷名麻績美宇宇と有る是あり倭姬命世
記小號麻績郷者麻績氏等別居此村因以為名也と見
えたるが如く借又姓氏録右京神別小神麻績速連天物
知命之後也と有る其長白羽神の裔を一神宮小奉
りて神衣を供奉するの一京小遺して朝廷の神衣小供奉
るの給へる者ありて天神本紀小天乳速日命廣瀨
神麻績連等祖と有る其本貫ハ大和國廣瀨郡あり
しと見ゆ上小云々か如く長白羽神天物知八坂彥命ハ父

子の間みてと所見なり然る小天乳速日命ハ津速產靈神
と天八坂彥神とハ其天物知命の子とて伊勢と京とハ別れたる其祖
の御名小近く天物知命と申すも其御末小天之辭代
主命國之辭代主命小對へる名と聞えたるが長白羽
神のハ猶上つ方の神と見えたり文武天皇御紀小
二年九月戊午朔以無冠麻績豊足為氏上無冠大贄為
助進廣肆服部連佐射為氏上無冠功子と有る麻績服
部相並たり此小氏上又助也定めさせ給へるを以て
其部の多並在りゆ事を曉る可く稱徳天皇御紀小神
護景雲二年二月辛酉左京人正六位上神麻績連足麻
呂子老右京人神麻績速連廣目等二十六人並賜姓宿祢

と有るは同三年十一月庚辰左京人神麻績宿祢足
麻呂右京人神麻績宿祢廣目等二十六人復爲神麻績
連と見えたるは僅小二年許の間宿祢の姓して有
ありけり又三代實録小伊勢國多氣郡百姓麻績部愚
麻呂復本姓中麻績公自歎云豊城入彦命之
後也と有る此小別あり其神麻績連小属たり麻績部
と聞ゆ即神名式小伊勢國多氣郡仲神社有る是あり
○白和幣の事ハ右小引り古語拾遺小令天日鷲神
造木綿以津咋見神穀木種殖之以作白和幣是木綿也
以上二物
一夜蓄
茂也と見えたる木綿の事ハ己上二百九白和幣
の傳小云り其以津咋見神の以字通證引十五下草成と訓
天日鷲神の率めて種殖しめ給へる義あり所あり

具前
今在信國富太常
之年貢木綿林
布及種物

實小然有べし故此津咋見神と長白羽神とハ御兄弟
あど小御在し坐て共小天日鷲神小御在すむを長
白羽神ハ專とハ麻績の方小御在し坐て神麻績連
の遠祖あり事右小云るか如し若て此津咋見神ハ木
綿作を播殖給ふの方小功坐す事此小所見たり少て著明けむが
其神武天皇段小令天富命率日鷲命之孫求饒地遺阿
波國殖穀麻種見えたる次小天富命更求沃壤分阿
波齋部率往東土播殖麻穀と有るハ其頃阿波齋部
云許小蓄息れりハ必長白羽神津咋見神二神の裔を
合せたる如く聞ゆりあり其中より後小長白羽神の

一統ハ別カ^{國麻績氏ノ成リ}津咋見神の子孫ハ阿波齋部^{ノ事}トシテ彼
國ハ留^ルリ^ハア^タク可^ク然^ルハ大嘗祭儀阿波國司^ハ
下^サル^ト大政官符ハ麻殖郡忌御服布二丈一尺木綿
三斤^ト有^ル右ノ拾遺ノ文ハ比校^スハ^此忌御服布ハ麻
布^ハ有^ル也^ト麻績氏^ノハ奉^ルズ彼國ノ齋部
氏^ノハ貢奉^ルヲ以^テ也然^モヤ^ト所思^フハ^ハ津咋見神^ノハ木綿^ノ事^ハ然^ル御功坐^ス神^ハ御在^リ
ノ祖^ハ其^ノ孫^ノ事^ト註^スル^ハ其^ノ阿波齋部
ノ祖^ハ可^ク故^ク若^シ津咋見神^ト申^ス名義^ハ上^ニ百^七ハ
も云^フ如^ク穀木^ヲ種殖^シ給^ハル^意ノ神名^ト通^エた
る^ガ右^ニ三^百小^モ云^フ木綿^ト麻^ト其^ノ殖^ル地^ハ程^ノ

地ハ蔀種^ル物^ハ上^ニ長白羽神^ハ麻績^ノ事^ハ功
有^ル神^ハ坐^セハ此^ニ共^ニ津咋見神^ノ種殖^シ給^ハル^ハ
以^テ有^ルベ^ク所思^フル^ハ以上^ニ物^ハ一夜^ハ蕃茂^也ト有^ル
も一神^ノ所爲^ハ成^ル註^リ如^ク聞^ユル^ハ合^セ
て思^フ必^ズ其^ノ種殖^ル物^共ノ一夜^ハ蕃茂^ル義^ヲ
を以^テ林^ナリ^者其^ノ傳^ハ五^十六^十角^ノ櫛^ノ尊^ノ活^ノ櫛^ノ
尊^ノ御名^ノ下^ニ説^ク物^ノ初^メ生^ル初^メ角^ノ具^年ト云^フ
て實^ハ其^ノ芽^ノ生^立ノ貌^ノ如^ク伸^ル者^ハ其^ノ
ハ其^ノ角^ノ櫛^ト津咋^ト同^義ノ言^ハ知^ルル^ハ
又^ハ角^ヲ唯^ハ津^ト云^フ例^ハ仁德^{天皇}三十^年御紀^大御歌

小菟怒瑳波赴と有ハ冠辞考ハ蘿^{ツクハフ}這の義ハ説れた
 ガ如ク其菟怒瑳ハ角草^{ツメクサ}の義蘿^{ツク}ハ和名扱ハ終石^石
 名領石和名豆太此草苞石木而生故以名之とも有テ
 角^{ツメ}蚕^{ツメ}の言ハテ又終^{ツク}の義をも包ナリ其外ハ椿ハ角
 葉木あり黄楊^{ツゲ}ハ角木あり茅針^{ツバ}ハ角花あり江津草^{ツクモ}ハ
 角牙藻あり天^{ツクシ}花菜ハ角串あり荅^{ツクシ}ハ角舎あり又網ハ
 角長と聞え凡ハ角芽と云義あり類猶幾許も有ぬ可
 うむむ右等の都ハ何れも角^{ツメ}の意ありを以テ此の
 名義を曉^{ツク}可^{ツク}又昨^{ツク}ハ芽ハ意見ハ知の意あり事例
 の如くふむ有け^{ツク}然^{ツク}ハ津^{ツク}昨^{ツク}見神と申すハ麻^{ツク}と穀^{ツク}
 を種殖して一夜の間ハ生出て

白綿縮布^{ハクワ}乃^{ハクワ}神衣

蕃^{ツク}茂^{ツク}り榮^{ツク}え^{ツク}りて昔和幣^{ツク}白和幣^{ツク}と仕奉^{ツク}可^{ツク}日^{ツク}物^{ツク}
 を初^{ツク}めて此^{ツク}時^{ツク}ハ為^{ツク}給^{ツク}へ^{ツク}功^{ツク}小^{ツク}用^{ツク}け^{ツク}御^{ツク}名^{ツク}小^{ツク}あり
 又古語拾遺ハ令^{ツク}天^{ツク}羽^{ツク}植^{ツク}雄^{ツク}神^{ツク}倭^{ツク}文^{ツク}遠^{ツク}織^{ツク}文^{ツク}布^{ツク}と所^{ツク}見^{ツク}た^{ツク}
 此^{ツク}神^{ツク}の御^{ツク}事^{ツク}又^{ツク}倭^{ツク}文^{ツク}連^{ツク}の事^{ツク}ハ傳^{ツク}三十^{ツク}百^{ツク}天^{ツク}孫^{ツク}降^{ツク}
 臨^{ツク}章^{ツク}倭^{ツク}文^{ツク}神^{ツク}建^{ツク}葉^{ツク}槌^{ツク}命^{ツク}の傳^{ツク}ハ云^{ツク}べ^{ツク}一^{ツク}偕^{ツク}此^{ツク}織^{ツク}文^{ツク}布^{ツク}ハ古
 史^{ツク}第^{ツク}四^{ツク}十^{ツク}八^{ツク}段^{ツク}徵^{ツク}ハ下^{ツク}文^{ツク}天^{ツク}棚^{ツク}機^{ツク}姬^{ツク}神^{ツク}の神^{ツク}衣^{ツク}を織^{ツク}給^{ツク}へ
 る所^{ツク}ハ所謂^{ツク}和^{ツク}衣^{ツク}是^{ツク}也^{ツク}と記^{ツク}せ^{ツク}る所^{ツク}ハ對^{ツク}へ^{ツク}て此^{ツク}の文^{ツク}布^{ツク}の
 下^{ツク}ハ所謂^{ツク}荒^{ツク}衣^{ツク}是^{ツク}也^{ツク}と有^{ツク}べ^{ツク}る所^{ツク}あり太^{ツク}神^{ツク}宮^{ツク}小^{ツク}奉^{ツク}る
 荒^{ツク}衣^{ツク}即^{ツク}文^{ツク}布^{ツク}あり其^{ツク}ハ伯^{ツク}家^{ツク}部^{ツク}類^{ツク}小^{ツク}記^{ツク}され^{ツク}たる大^{ツク}嘗^{ツク}會^{ツク}
 降^{ツク}神^{ツク}御^{ツク}祝^{ツク}文^{ツク}小^{ツク}音^{ツク}筋^{ツク}乃^{ツク}文^{ツク}布^{ツク}乃^{ツク}荒^{ツク}衣^{ツク}乃^{ツク}神^{ツク}服^{ツク}見^{ツク}え^{ツク}て下
 小^{ツク}音^{ツク}筋^{ツク}文^{ツク}布^{ツク}云^{ツク}云^{ツク}太^{ツク}神^{ツク}宮^{ツク}荒^{ツク}衣^{ツク}同^{ツク}之^{ツク}と有^{ツク}以^{ツク}て著^{ツク}る取^{ツク}意^{ツク}

有が如く此即荒衣あり若て古語拾遺神武天皇段小
 天日鷲命之孫造木綿及麻并織布古語阿所見たる
 木綿之麻之ハ上ハ謂ゆる白和幣良多倍和幣ハ當り此織
 布ハ即織布ハたる意ふれハ右の文布ハ當り可ヒツ又其次ハ其
 裔今在彼國當大嘗之羊貢木綿麻布及種ニ物ニ有る
 麻布を古本ハ阿良多倍と訓るを以ても倭文の麻布
 あり事ハ知るるめり又太神宮式ハ和妙衣者服部氏
 荒妙衣者麻績氏云々織造ニ有る麻布少て謂ゆる倭
 文あり事右小云るが如く万葉二二十下小荒妙乃衣之
 袖者五三十下小荒妙能布衣遠他尔と有るハ打任せ

たろ方の麻衣を云あり又一二十下小荒妙乃藤原我宇
 倍尔又二十下荒妙乃藤井我原尔三十五下小荒枿藤江之津
 尔十五十八下小ハ之路多倍能藤江能宇良尔ハ吉今集小謂ウヲ藤衣ハ藤皮を剥キ糸ニ成リ織ルと有るハ一ハ
 安良多倍乃と有るハ是あり倭荒ハ和ハ對ハる言ハ
 此ハ神衣の知衣小並對ハる言ハ又
 同ト布の中少て織目の細くさと鹿きとを分て荒
 衣和衣あども云ひ又右小云るが如く絹と雖も細鹿
 の別有る事少て賦役令義解ハ細爲絹也鹿爲純也
 有る絹ハ熟絹の和るるありふて好絶ハ和名抄ハ阿之
 岐沼と有る鹿く悪く日義ありあり孝徳天皇二年御
 宇麻と有るハ細ハ善ク意小用へる字あり事右の絶
 ハ鹿あり故ハ惡く日義ありハ合せて思ふ可く但此

二王計製式と取河
國傳文平端と有
世と為一

の細麩ハ其品ノ是ハ善惡ト云ハ非ズ善惡ノ本義善
ハ寄來アリ惡ハ彼去アリ知ラズ多ク麩ニクニ
小就テ借ハ與志又文布ハ釋紀ハ先師申云古語拾遺
阿志トハ云々アリ
文布云云號綾布之類歟建久諸祭興行之時大藏省年
預申狀有書筋文之布云云所見たれハ次ハ其項世
ハハ絶たリ一多可一駿河風土記ハ阿部郡思津機
山或志三機山又號青葉園有山上憶良短歌蘆河路
乃青葉園尔身波須禮止云云有思津機山ハ倭文
機山ハ青葉園ハ青斑園アヲハシヲカノ聞ゆルモ右ノ書筋文ハ
近々可クハ冠辞考ハ釋紀右ノを引テ其筋ハ後
世小島織ハ物ノ狀ハ可一乃葉十四ハ遠江國歌

ハ文舊書言日本傳
ハハハハハハハハハハ
云リ

ハ伎倍比等乃萬太良夫須麻ト詠ニ漢籍魏志ハ此國
ハ斑布を贈リけハ事有リ此等即古ノ倭文ト云
ハた少々儲其有書筋文ト云ハ何れノ色を本トシテ書
筋ノ文ハ有けハ今考ハ可ハズト雖モ此ハ
ハ稍ハ麻穀ノ二物共ハ一夜少テ蕃茂ハ被用ハ
事ハ有けハ何を以テ書ク練リテ文を成ハ暇有
ム故思ハ小上文ハ令天日鷲神造木綿ト有ハ謂ゆハ
白柝ハ一ハ其穀不木を以テ製ハ由右二百九ハ云々如
クあれハ右白綿を本トシテ青麻を織交ハたハガ
文有テ當時奇ハハ甚愛ハたハ物ハ為ハつハ

ありけり又其文と云ハ昔白を斑小物爲たりて詔
ゆ々今世の島織の如くして縦小筋の造と通し有
けり々々出雲神賀詞あり小も倭文能大御心も多親
尔と有ハ其鮮明あり事小称へつる者小あり有ける
右の有昔筋文と云々少しか白ハ主かして昔ハ客の
如くありを知べし借通證小引々度會延任説小正中
豊受大神宮御銘秘記曰倭文御裳一腰件倭文永長有
沙汰自公家被仰布歟自神宮布者裝束不見因是以羅
被調進香色也と有る御裳ハ大神宮式度會官裝束
倭文裳一腰と見えたり御裳ハ故小朝延より布々と
仰問せ給へるを神宮ゆても己小其故實を亡ひけり
々々見えざり由を申し々々羅を以て奉り給へ
る麻の色甚相似たり者ありハ若其倭文の昔筋と云
ハ其小似たり々々出故其倭文ハ大神宮式小倭文裳
來つる事あり小々

見え又武烈天皇御紀歌小於 袞枳泐能泐於寢能之
都波枳夢須寐陀梨又万葉三四十小古昔有家武人之
倭文幡乃帶解替而 有ハ倭文を以て帶と爲
つるあり又十一二十小去家之倭文旗帶半結垂執云
人毛君者不益と有る次小一書歌古之狹織之帶半云
こ見えたり右の歌共を引て冠辞考小右の幡旗共
小借字して機あり此狹織ハ即倭文の狹く織たり小
て帶小用ひむ爲と見ゆ今真田サナタと云て細き紐有も狹
之織あり十三十八小倭文幣半手取持而竹玉呼之自
二貫垂十七四十小知波夜夫流神社尔底流鏡之都尔

等利蘊倍十九三十四小木綿半次肩尔取掛倭文幣半手
尔取持而又出雲神賀詞小倭文能大御心毛有を臨
時祭式同度の註文小倭文二端長各一丈四尺二寸有り
賦役令小布の幅二尺四寸と有りハ大凡似たり此等
ハ衣と爲れバ幅も廣一且上代の任小後小神小獻々
ありけり儲甚も上代よりの織物タタミあり故小万葉小す
ら古昔の倭文織と訓り且皇朝の古小文有る布ハ唯
是のアヤメあり故小實小文布とも云うむと云れたり
諸右小引る伯家部類吉部小文布と有て下小太神宮流妙
同之と所見たる小太神宮式を見れば神衣祭條小荒

妙衣八十足四十足廣一尺六寸四と所見たれば其長
廣共小物小因て一様ありざりおめり又雄略天皇
四年御紀大御歌小抱磨ニ枳能阿娑羅你陀ニ伺施都
魔枳能阿娑羅你陀ニ伺有ハ胡床小玉をも倭文
をも古小纏たりあり又此小就通證ハ四十小倭
文手纏敷二毛不有身持五二十小倭文手纏敷母不在
身二波在等九三十小倭文手纏賤吾之故有る歌共
を引て此言下以文布爲手纏也辟韃也と云々ハ然る言ふて手
纏ハ傳十二百四十五百二十小云々が如く貴人の料ハ
玉ありめども賤人のハ倭文也辟韃も手小纏持て辟韃

小ハ爲つるありけり然るハ次ハ引る常陸風土記小
雖白刃不得戴断之云絶の事ふれども猶其より倭文ハ許あり強き物あり有けり然
る戎具小ハ用ひたりけむ其ハ多く庶人の物爲る
事あり一々バ自然小諺之成て人数ありぬ程の賤一
き者小云ふ發語之ハ成ぬるあり但通證ハ賤民曰
と云々ハ俗意あり賤民志豆と云ハ下着の義あり
貴人を阿孫人志都蓋此義也と云ハ上立人あり對あり思混ふ事
勿れ又古今集小古の倭文の麻環環部部あり佳りも盛
ハ有る者あり伊勢物語小古の倭文の麻環環返返一昔
を今小成す由も新古今集小數ありハ斯らま
やハ世中ハ甚哀きハ倭文の麻環環あり右ハ云
ふ戎具の環とハ同くハ此等の麻環ハ冠冠考
小彼倭文布を織むハ料の紡麻ハ内を虚虚ハ外を圓圓
巻たり物故ハ環とハ云あり是を閑蕪閑蕪とも云ふ古
事記水垣宮宮ハ以閑蕪紡麻貫針刺其衣衣欄云と和名

△自餘輸曝布
と有り又新様
樂記ハ常陸絛
布云

△釋小倭文神々天
云此神在何處或
師中云生常陸國依
之諸景帶物内倭文
者常陸之所濟也
有是あり

秋小卷子和名閑蕪閑卷所傳續麻圓卷名也有るを合
世見よ閑蕪ハ經麻の意り人の臍也此卷子小似た北
ハ然るありむと云 偕天孫降臨章小倭文神建葉槌命
と有る下小倭文神此云斯圖梨俄未と見え天武天皇
十三年 御紀十二月 小倭文連見えたり下小倭
文此云之頭於利と有るハ斯圖梨ハ之頭於利あり拾
遺小織アルニツク文布と有る是あり常陸風土記小久慈郡ニ西
里靜織里上古之時織綾之機未知人未在知人知之干時此村初織
因名之見えたり和名抄郷名小久慈郡倭文と有り
主計寮式小常陸國倭文三十一端見えたりを神名
式小當郡靜神社名神御在一坐り光孝天皇實錄小仁

和元年五月言常陸國從五位下靜神社授從五位上
 之有少常陸誌小今屬那賀郡傳云平力雄命之見元又
 二十八社鎮座記小今屬那賀郡在靜村舊名靜織里
 在久慈郡以西云今呼為靜者逸織字耳祠山上祀平
 力雄命也云高房明神在社院所祭建葉槌命之見元
 於此ハ靜神社ハ平力雄命ハ建葉槌命ハ其攝社
 小祀ハハ給ハあハあハけり又通證小鹿島神宮前有ハ高房
 社社又云倭文所祭建葉槌命也之有少其高房ハ云ハ出
 雲風土記小大原郡高麻山云吉幡佐草昭命是山上
 麻蒔初故云高麻山之有少同ト意味ハ可ハ拾遺小

古語麻謂之總也之有少も思合す可ハ者ハあり
 十八下常陸國防人の中ハ倭文部可良麻呂ト云人那
 賀郡の末ハ出たハ古ハ右の靜織里ハ久慈那賀
 兩郡小巨々地ありハハこハ猶此天羽槌雄神の傳ハ
 小就テ云ハ此ハ文布の事又常陸風土記久慈郡小郡
 東七里太田郷長幡部之社古老曰珠賣美万命自天降
 時為織御服從而降之神名綺日安命本自筑紫國日向
 二折神之峯至三野國引津根之丘後及美麻貴天皇之世
 長幡部遠祖多命命避自三野遷于久慈造立機殿初織
 之其所織之服自成衣裳更無裁縫謂之内幅或曰當織
 純時輒為人見閉屋扉階内而織因名鳥織強兵利劍雖白及不得

裁断今毎年別為神調獻納之（見えたり）と綺日安命（和名枚小）の綺俗云於
 利毛能又一訓加無波太似錦而薄者也と有れハ綺ハ
 神服カムガミの義あり可（百廿二）日安ハ梭安（御名）めて善く織給へ（由）
 あり（み無仁天皇御紀ハ綺ヲ邊と云ふ人見え又）何（仁）德天皇御女ハ幡梭皇女と申す御在（坐）
 も同下意の御名ありをや（右の趣ハ天孫ハ供奉して天降生）諸其筑紫（後真）者（者）と見えたり美濃（小）至（了）
 ね（其）神の子孫あり可（ま）が神武天皇御世ハ天富
 命の東土ハ行給ひ一時ふど（少）も有べくも多（成）命（の）
 云ハ次ハ造（立）機殿（有）ハ依れ（る）名と聞ゆ織（純）ハ和
 名枚（小）純（和）名阿（之）岐沼（繒）似布也と見え賦役令義
 解（小）細（為）絹也（鹿）為（純）也と所見たりハ繒の中めても

甚粗（き）物（ふ）り自戌衣裳更無裁縫（云）ハ當昔然（巧）
 あり機關（を）為出たりありけり謂之内幡（ハ）神社令（神衣）
 義解（小）麻（續）連等續麻以織敷和衣以供神明（有）を釋
 敷和者宇都波多也と所見たりハ麻の事ありハ此
 ありハ主計寮式（ハ）も常陸國純七尺（ハ）見えて物ハ異
 ありども共（小）敷（和）為（る）物あり故ハ然も云ありや諸
 此ハ内幡ハ上件ハ自成衣裳更無裁縫（有）を受たり
 ありハ本（ハ）全織の義あり事論無（一）雖も冠辞考
 あり云ねたり（カ）如く發語（ハ）打麻（ハ）麗麻（ハ）あり内
 木綿（ハ）麗木綿（之）あり又万葉十六（ハ）見えたり打

△長幡部之社云ふ
も合ひて

八本國神名帳小不
破郡從五位上引常
明神と有る是亦
其地

拵者ハ麗拵者ハ共小美々々ハ麗ハ一リ義ホバ織
目の繁ク細ク和ヤクハ謂テ美織ト云ル
けり古史徴ハ天羽檜雄神ノ亦名ト定ルヲナクハ
系記ヲ知テ是女ヲ推當タル者アリ
ノ全織ノ事ハ依ルヲナク者多ク可一神名式ハ常陸
國久慈郡長幡部神社ト有ル是ホ小二十八社鎮座記
小在太田郷幡村舊曰長幡村祭神多氏命是長幡部始
祖ト有ルハ天之志良波神社トハ同郷ホ小カテ間遠
クゾ御在ハ坐ホウケリ 三野國引津根之丘今考ホ
邪河宮段日子坐王ノ御子ノ中ハ次神大根王者三野
國之本巢國造長幡部連等之祖ト有ル據テ考ルハ此
ホ多氏命ト長幡部連ト有テ連ト造ト考ルハ後
加々姓アリ然レハ神大根王始テ美濃國小任され給

ト具兄富持命ト
ハ美濃ト常陸ノ長
幡部祖ト具長
幡部連ノ率アリ
群多氏傳三十一
卷八百十一下云
云々

今傳上五卷三十一下
引大國類聚方三十一
卷美濃國本巢紀人
家方有引並ハテ
佐藤美濃國紀人
云々本巢國本巢紀人
云々人定云々見
たり其ハ天津彦根
命ノ裔ホト傳上卷
三十七下云々如ク
珠盟約章第ニテ重
小詔カテ僕之速命
同神ハ御在ハ坐
其ホ不取部連ト有
七河内志寸ノ同族
ハト云々其
仕奉ルヲナリシ
本巢國造以下有
自カテハ就テ命
以テ本巢郡ホト
思定ルヲナリ

ハ後ホ小其長幡部ノ群ノ主ト成給多氏命
ト始トシテ其部ヲ率テ常陸國ホ下給後其子孫
アリ 氏人猶其長アリ 故ハ長幡部連ト有ル多氏
命ハ其下風ホ坐レク長幡部連ト有ル然レ
ハ引津根之丘ハ其本巢郡ノ邊ホ可一若テ類史
節婦ハ弘仁八年閏四月戊子常陸國人長幡部福良女
授テ初位上云々ト有ルハ連ト造トモ
非ハ唯其部ト多氏命ノ末ホト云々 ○又古語拾
遺ノ上ホ引ル織文布ノ文ホ次テ今天棚機姫神織神
衣所謂和衣 古語ホ 有ル此ハ以前素戔鳴尊ノ御
荒ビノ所ホ又見天照太神方織神衣居齋殿則剥天
班駒穿殿壳而投納ト見えたる其ハ第一一書ホ是後
稚日女尊坐于齋殿而織神之御服也ト有ル如ク其
時ノ也稚日女尊ノ織給ハ云テ古事記ホ天衣織

△の棚機の義ハ
傳十一十九ハ註ハ

女ハ有ル是レ事ハ己ノ上ニ七ノ十ノ小ハ委シ註ス如ク
若シ此ノ天ノ棚機姬ノ神ト有ル神宮雜例集ハ載シ神服
公等解狀小ハ樹畏天照坐皇太神御坐天原之時以シ神
服部等遠祖天御杵命爲司以八千千姫爲織女奉織シ
有ル一ハ一ハ以テ異名同神小ハ御在一坐けル天御杵命
大和國神別天神小服部連天御中立命十一世孫天御
杵命之後也ト見ル之也但服部連小ハ燭之速日命ノ
後多見ル傳十卷九十九ト天棚機姬神ハ天孫降
臨章第一書下照媛ノ歌小阿妹奈晏夜乙登多奈婆
多逆之有ハ在天也第織女ハ此神ノ事を詠ス也
傳十五三百三十七ト八十ハ少ハ註セス如く顯國ハてハ

宗像神ハ然ル御切御在一坐けル故ハ織女神トも織
幡神トも申奉ル也也ト此ハ因由也ト又和名秋景宿
類ハ牽牛小對へテ織女を和名太奈八太豆女ト有ス
也ト此神ノ名を附會テ然ル星ノ名トハ爲つル也ト
其空言を詠ス七夕歌ハ万葉十八ト小棚機之五百機
立而織布之秋去衣又三十ト棚幡乃雲衣能又一十ト織女
之今夜相奈婆又織女之伊渡左牟尔八三十ト小織女之
神續三更之十七ト小多奈波多之船乘須良之也也ト見
え又八三十ト小牽牛者織女等十七ト小爲我登織女之
其屋戸尔織白布織之氣鴨又孫星與織女今夕相霜又

二十 ^{又織女之天津領中} 牽牛與織女今夜相^あふ^ど有^ハ右^ハ引^ル和名抄の
 如く訓て即桐機姫の意あり其外ハ織女ハ云ず
 して七夕歌ハ猶^{二十}十^七ハ君不相久時織服白袴衣又
 三十機踏木持往而天河打橋度又古織義之ハ多字此
 暮衣縫而君待吾^又足玉母手珠毛田良^白爾織旗^子公
 之御衣^ハ織將^堪可^聞あ^ど機^を織^ル事^以て詠^ル也皆
 此天桐機姫神の神衣^を織給^ハル^ル故事^を取^ル者^ハ
 又此神の事實^をも徴^ス可^ク事^も有^アル^ハ古^ハ
 其傳の委^レく傳^ハリ^ケむ程^の事^{あり}ハ^ハあり^也此外^ハ
 太神と素戔嗚尊の御誓^爲とせ御在^一坐^一天安河^の
 事^を天漢^ハ取^成したる^あど七夕の歌^ハ多く^ク神代^の

故事を用ひたる者ありけり^ハ其^空言^{ころ}神衣^の事
 ハ惡む可^クり^ケれ語^ハ取^ベと事^多り^ケり^也神衣^の事
 ハ上^{二十}ハ云^リ和衣^ハ上^{二百}九^ハ云^々如^ク繒^服
 云^ハあり^神祇^令神衣^祭義^鮮ハ此^神服^部等^齋戒^潔清^以
 參河神調 赤引神調糸織^作神衣^有を^太神^宮式^ハ
 右和妙衣者服部氏織造^見え^神衣^祭詞^ハ服^部麻^績
 乃人等^乃常^毛 奉仕^留和^妙荒^妙織^乃御^衣云^々有^リ
 又大嘗祭儀ハ九月上旬神祇官^差神服^社神主^一人
 爲^神服^使申^官賜^驛鈴^一口^遺參^河國^喚集^神戸^卜定^織
 神服長二人織女六人^工手^二人^有て^下ハ^其織^ハ
 服^を繒^服有^て履^服對^ハせ^{たり}又^四時^祭式^六

合三卷五十二下小字有和細布本と有り深て其外小

月晦日御贖條あり荒世和世御服を其下小ハ荒服和
服と云り右等ハ何れも麻布の荒衣あり小對して繒
ありを和衣とハ云あり如此く布とも繒とも其物を
云ずして其狀小依て名と爲と事實小雅びたりけり
古昔の言語の常小あり有けり
事ハ六有れども和奴の事ハ二万葉小ハ上三百九丁
十二丁小和靈乃服寒等尔と云事有れども和靈ハ尔
岐多閑とハ訓べり小云々ガ如く荒奴の若其
ありむ小ハ字小誤有れり ○相與ハ右小中臣連遠
祖天兒屋命忌部遠祖大玉命掘天香山之五百箇真坂
樹而云云と有より義義たりあり其委委り事事の狀ハ第
三、一書小於是天兒屋命掘天香山之真坂木而中乃使

忌部首遠祖大玉命執取而廣厚称辞祈啓矣と見え古
事記の也召天兒屋命布刀玉命而内枝天香山之真男
鹿肩枝而令占合麻迦那波而天香山之五百津真賢木
矣根許士尔許士而中此種ニ物者布刀玉命布刀御幣
登取持而天兒屋命布刀詔戸言禱白而下見えたり
是あり此時八百萬神等皆共小此場小會合い給ふと
雖も諸部神の中小ハ幣帛を供作と神等も御在り坐
り又千力雄神天鈿女命の如りハ各其仕奉り可き事
共の御在り坐けりハ其御祈禱の御事小就てハ天兒
屋命大玉命ニ柱相並ばりして仕奉り給へりあり然と

小第三二書の趣めて其大幣帛を天兒屋命の太玉命をして執
持しめ給へる如云るハ中臣氏をして忌部氏の上ハ
置むと爲たり用意の程見えて甚味氣無本り
て天兒屋命ハ廣厚大石のト事く称辞して祈啓此け可給ふり職神あり太
玉命ハ諸部神を率て幣帛を造るの此めてハ太御
幣と取持して捧奉り給ふ可神り御在り坐て各其
掌せ給ふ事あり別ハ小渡せ給へる其めてハ
叶はず又古語拾遺ハ令太玉命捧持称讚亦令天兒
屋命相副祈禱と見えたるハ太玉命を主として天兒
屋命を副と成りたるありハ愈々神なり雖も

中臣氏の傳ふるハ然る強なる事も有る故ハ甚く
發憤めて斯私事私及ばれり者とも見ゆれば此正書
の正しきハ云も更あり古事記ハ布刀玉命布刀御幣
登取持而天兒屋命布刀詔戸言禱白と有る茂持の
本末頗けざる傳めて中め正しき説ありける中臣
の相争ひけり事ハ續紀め有る殊ハ甚しきハ日本
後紀ハ大同元年八月庚午先是中臣忌部西氏各有相
許中臣氏云忌部者造幣帛不申祝詞然則不可以忌部
氏爲幣帛使忌部氏云奉幣祈禱是忌部之職也然則以
忌部氏爲幣帛使以中臣氏可預使彼此相論各有所
據是日勅命據日本書紀天照太神閉天磐戸之時中臣
連遠祖天兒屋命忌部遠祖太玉命云相與致祈禱者
然則至祈禱事中臣忌部可相預又神祇令云其祈年
次祭者中臣宣祝詞忌部班幣帛踐祚之日中臣奏天神
壽詞忌部上神璽劍鏡六月十二日晦日大後者

中臣上御被麻東西文部上被刀讀被詞訖中臣宣被詞
常祀之外須向諸社供幣帛者皆取五位以上卜食者元
之宣常祀之外奉幣之使取用西氏必當相半自余之事
專依令條也と見えたる是あり如此く西氏の家説區
ニあり上小多くハ中臣氏權小棄て恣小振舞けむ
りり同ト三年小古語拾遺を録して奉るれり也己小
止事を得ざり時此ハ中臣神忌部神相與ハ其祈禱の
勢ありを以あり御事ハ至と有て預給へり例と成て後世ハ至りて
中臣氏齋部氏の仕奉る職掌ハ成り故天孫降臨
章第二一書ハ高皇產靈尊因勅曰吾則起樹天津神
籬及天津磐境當為吾孫奉齋矣汝天兒屋命太玉命宣
持天津神籬降於葦原中國亦為吾孫奉齋焉と有ハ祈
年月次新嘗祭等詞ハ高天原ハ神留坐皇睦神漏伎命

神漏弥命以天社國社登稱辭竟奉と有る事の起あり
儲又右の文の先ハ乃使太玉命以弱肩被太玉禪而
代御手以祭此神者始起於此矣且天兒屋命主神事之
宗源者也故俾以太占之卜事而奉仕焉と有ハ此磐戸
隱の時の吉例ハ依て此二神相與ハ佗神の祭祀ハ奉
仕りり其始あり儀式二月四日祈年祭儀六月十二
月次祭ハ中臣就座讀祝詞每一段了祝部稱唯中忌
儀亦同部二人學神部二人進夾案立監頒幣事略と有ハ己小
令條ハ其祈年月次祭者百官集神祇官中臣宣祝詞忌
部班幣帛と有る事ハ祝詞式の始ハ元祭祀祝詞者

御殿御門等祭齋部氏祝詞 以外諸祭中臣氏祝詞と
見え又其祈年月次新嘗祭等詞小屬て辞別忌部能弱
肩亦太多須支取掛也持由麻波利仕奉禮幣帛云云
之有は是あり又大神宮豐受宮神嘗祭詞小中臣某官
某位某姓名字為使忌部弱肩亦大禰取懸持齋理令
捧持進給御命申給中^申有が如く大神宮式
小其幣帛使小中臣忌部を差り御定あり其月
次祭詞小大中臣太玉串亦隱侍天今年六月十七日乃
朝日乃豐榮登亦祢申事又神嘗祭詞小大中臣太玉
串亦隱侍天今年九月十七日朝日豐榮登亦天津祝詞

乃大祝詞辞祢申事あむ有て中臣氏ハ其祝詞を
主れバ專幣帛使と云べりハ忌部氏小あむ有ける
是即此天石嶺の事ハ本着て彼御天降の時小皇祖天
神の彼中臣神忌部神小依り別とせ給へる所あるを
其裔孫あ中臣氏忌部氏の其職小仕奉り状あり
然るを拾遺小肇自神代中臣齋部供奉神事無有差降
中間以來權移一氏と有か如く中臣ハ稍小昌え忌部
ハ日こ衰たり一故小神世の故事小違ひたる事
あむ多く出来小なる皇祖天神の御心小如何思ふ
すも又天照太神本與帝同殿故供奉之儀君神一体
始自天上中臣齋部二氏相副奉禱日神猿女之祖亦解
神怒然則三氏之職不可相離云と有が如く無てハ
得有御事小ころ儲右小引古語拾遺小令太玉命捧持祢
讀亦令天兒屋命相副祈禱と有ハ思兼神の謀給へる
所ありと下小儲備既畢具如所謀乃太玉命以廣厚祢

詞啓曰吾之所捧寶鏡明麗恰如汝命乞開戸而御覽焉
仍大玉命天兒屋命共致其祈禱焉有ハ相與ハ祈禱
給ふ所ハ故相照ハ見ハ上ハ大玉命捧持稱讚ハ
有ハ捧持ハ件の五百箇眞坂樹の大幣帛ハ事申す
も更ハ次ハ稱讚ハ下ハ廣厚稱詞ハ有ハ其事ハ
大玉命の稱辭ハ其大幣帛ハ捧奉ハ日像之鏡ハ就
て稱奉ハ給へハて天兒屋命の大祝詞ハ本ハ
別ハ事ハ在ハ傳ハ其神武天皇段ハ尔乃立靈
時於鳥見山中天富命陳幣祝詞禮祀皇天中略是以中臣
齋部俱掌祠祀之職ハ有ハ祝詞ハ其幣帛ハ事ハ就て

祝詞を申さハ事ハ聞ゆハ摠ての中臣の其祈の
事ハ就て大祝詞を稱申せハ各同ハ事ハ給ふ
り然ハ大玉命ハ其幣帛を捧けて其詞を述給ハ天
兒屋命ハ其大玉命の執持せハ大幣帛ハ副て謂ゆハ
大祝詞事を廣く厚く稱辭竟奉給へハ御在ハ
坐ハ故其天大玉命の稱讚の御詞ハ右ハ吾之所
捧寶鏡明麗恰如汝命乞開戸而御覽焉ハ所見たハ
天兒屋命のハ第三ハ一書ハ於是天兒屋命云
廣厚稱辭 祈啓矣ハ時日神聞之曰頃者人雖多詰
未有若此言之麗美者也乃細開磐戸而窺之ハ有て此

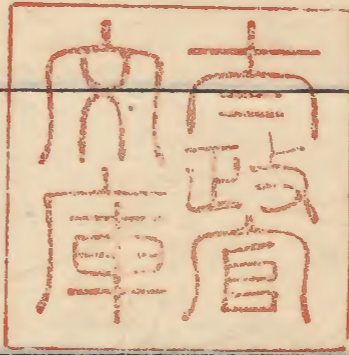
左右拾遺の文を引

事ハハ主ノ御在ノ坐々有レども其太幣帛を取捧ル
る傍ハ在テ祈申サる可けれバ天兒屋命ハ太幣帛ハ
相副給ヘル義ハ見ベリ文あり可其ハ此ハ右ノ
命相副祈禱ト見え又仍太玉命天兒屋命共致其祈禱
焉ト有テ事ありども次ハ則天兒屋命太玉命以日
御細廻懸其殿ト見え其より以下ハ何時も然有テ
以テ考ルハ天兒屋命の相副ハ太玉命ハ必ず太幣
帛ハ相副給ヘルあり然レバ記傳ハ卷四十七下ハ
抑中臣ト忌部トハ此段ハ所見ナク如ク相並ベル氏
ありハ中古より中臣ハ此上無ク榮え忌部ハ甚ク衰
たる事ト憂ヘたるガ彼書の主意あり故ハ良も爲レ
ハ中臣神ト題して忌部神ト廢たスガ實ハ過タル事
多キゾ一ト云ハたれども強ハ然レハ非レ可
クも
○致其祈禱焉ハ上ハ干時八十萬神會合於天
安河邊計其可禱之方ト有ハ應ヘたる所あり右ハ引

拾遺ハ高皇產靈神會八十萬神於天八湍河原議奉
謝之方ト有テ次ハ其太幣帛の儲を云大玉命捧持杯讚亦令天兒屋命
相副祈禱ト云ハ此所ハ至ルレ仍太玉命天兒屋命共致
其祈禱焉ト見えたるも此ハ同ト其伊能流の言義ハ
上百四十ハ下八ハ云リ儲履仲天皇五年御紀ハ所見タル禱
而不祠の語ハ因テ此を考ルハ禱イハレト祠イハレト異ルレ同ト
ルヲ禱ハ此ハ所見タル第二一書ハ天兒屋命則以
神祝祝也又第三一書ハ於是天兒屋命云ニ廣厚祢辭
祈啓兵ト有ガ如ク其乞祈ト奉テ筋の事ト一向ハ神
ハ申一宣ト云あり又古事記ハ天兒屋命布カ詔戸
言禱白而ト有テ類ハ本より禱

あつて祠小ハ非ず能、其差別を知べし者あり景行
天皇十二年御紀ハ天皇祈之曰云、是時禱神則云、
あつての如く唯小物を乞
祈をいも禱とハ云あり祠ハ神小物を獻つて齋奉る
事小限れり者あり此ハ掘天香山之五百箇真坂樹而
上枝懸ハ坂瓊之五百箇御統中枝懸ハ咫鏡下枝懸書
和幣白和幣と見えたりを古事記ハ此種ハ物者布刀
玉命布刀御幣登取持而と有り此第三一書ハ乃使
忌部首遠祖大玉命執取而云、見え又此ハ天鈿女
命の巧作俳優して御怒を解奉りたりと想て祠ハ
る者あり其ハ天孫降臨章第二一書ハ先大玉命の奉
給へる供作と諸部神ハ其幣帛を令仕奉る事を並べ

擧云て其尾ハ乃使大玉命以弱肩被大手襪而代御手
以祭此神と有も其物共と持捧けて神小奠とを以て
祭とハ云るあり然れハ此少て二神相與ハ其祈禱を
致し給へる中ハも天兒屋命ハ其禱を専主ハ給ハ大
玉命ハ要と其祭の方をまどらせ給へるあり有り
猶四神出生章第五一書ハも土俗祭此神之魂者花時
以花祭又用鼓吹幡旗歌舞而祭矣と見え又天孫降臨
章第一一書ハも當主ハ汝祭祀者天穗日命是也と有り
又神武天皇御紀ハ夢有天神訓之曰宜取天香山社中
土以造天平窠八十枚并造巖窠而敬祭天神地祇と有
て次ハ乃以此埴造作八十平窠天手扶八十枚巖窠而
降干丹生川上用祭天神地祇と有也と有り祭ハ神小物
を奉りて齋奉るを云て禱ハ其小就て事を祈むあり
同トく相離れざる物
○致ハ為至あり祝詞ハ多く祢



辞竟奉_レ云_レ小竟_レ同_レト_レ其_レ至_レ上_レ書_レ盡_レ極_レむ_レ事_レ云
 あり常_レ小_レ至_レ云_レ同_レ言_レあり_レ故_レ小_レ天_レ孫_レ降_レ臨_レ章_レ第一
到_レ同_レト_レ用_レいた_レり
 一書_レ小_レ故_レ汝_レ可_レ以_レ送_レ我_レ而_レ致_レ之_レ矣_レ有_レ下_レ小_レ即_レ天_レ鈿_レ女
 命_レ隨_レ猿_レ田_レ彦_レ神_レ所_レ乞_レ遂_レ以_レ侍_レ送_レ焉_レ有_レ又_レ海_レ宮_レ遊_レ行_レ章
 第八_レ一_レ書_レ小_レ是_レ時_レ鰐_レ魚_レ策_レ之_レ曰_レ吾_レ者_レ八_レ日_レ以_レ後_レ方_レ致_レ天_レ孫
 於_レ海_レ宮_レ唯_レ我_レ王_レ駿_レ馬_レ一_レ尋_レ鰐_レ魚_レ是_レ當_レ一_レ日_レ之_レ内_レ必_レ奉_レ致_レ焉
 有_レ下_レ次_レ小_レ隨_レ其_レ汀_レ而_レ進_レ者_レ必_レ至_レ我_レ王_レ之_レ宮_レ有_レ下_レ致_レ之_レ
 至_レ對_レひ_レた_レり_レ万_レ葉_レ三_レ十_レ六_レ丁_レ小_レ天_レ雲_レ乃_レ曾_レ久_レ故_レ能_レ極_レ天_レ地
 能_レ至_レ流_レ左_レ右_レ二_レあ_レじ_レの_レ至_レ小_レ同_レト_レ此_レ日_レ神_レ小_レ太_レ幣_レ帛
 として_レ捧_レ奉_レ可_レき_レ種_レの_レ物_レ共_レを_レ心_レ足_レひ_レ小_レ儲_レ備_レへ_レ奉_レ

